
短編ホラー小説集

ダメ坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編ホラー小説集

【Nコード】

N0685V

【作者名】

ダメ坊主

【あらすじ】

ホラーのショートショート集です。お好きな話をどうぞ……

《注意》この小説を見て、何が起きても一切責任は取りません。
百話で完結させて頂きます。

この部屋いるかも（前書き）

2011/10/21 改稿。

この部屋いるかも

働きたくないからという理由で大学に入学をし、バイトと仕送りで生活をしながらも何事も無い平凡な日常を過ごしていた夏の出来事である。

今日は友人の家で引越し祝いをする日だ。外を歩けば蝉などの虫達の声が暑さを感じさせ、焼けるような日差しが袋の中のお酒に汗をかかせる。僕達三人は軽く汗ばみながらもようやく友人が引越しをしたマンションに到着することが出来た。

「『ピンポン』酒持ってきたぞ！」

「はぁーい」

チャイムを鳴らすと友人が まだ引越し作業の途中だったのか

頭にタオルを巻いたまま扉を開けた。

友人はそのまま僕達三人を部屋に招き入れた。

「引越しお疲れ」「酒持ってきたからさっそく飲みまкруうぜ！」

僕よりも先に入室した二人のカップルはお酒が飲めるが嬉しいのか、挨拶をほどほどにしながら靴を脱ぎ部屋に入りこんだ。僕も二人に釣られてお酒が入った袋を持ったまま入室する。

予想通り引越し作業の途中だったのか、部屋のあちこちに開けられたダンボールが置かれていた。

僕達四人は部屋に入った後早速お酒を飲み、たわいも無い話をした。その風景はいつもの飲み会の雰囲気と変わらず、いつも通りの平凡の日常であり、大学にいる間はこの関係が続くものだとは僕は信じていた……

深夜12時も過ぎ、もうぼちぼちお開きかと思っただころ友人の彼女

の顔が真っ青で気分が悪そうにみえた、僕は飲みすぎたんだろうと
思っていた。そんな彼女の様子に彼氏も気が付いたのか「飲みすぎ
たか？」と心配そうに聞く。

「うーん 違う。1時間前からずっと女の人の声が聞こえるの、
でも皆には聞こえてないみたいで少し恐くなったの、この部屋いる
かも……」

「冗談言つてえ、飲みすぎなんだよお前は」
慌てて彼氏が彼女の言ったことを流そうと必死になっていた。

僕はそんな様子を見て「……またかよ」と思った。

この子は前も僕の家でこう抜かしやがった。彼氏には悪いが僕はこ
の子が嫌いだ。もしそれが真実であっても誰も得をしない事を言う
べきではないと思う。前は自分の事だったので笑って我慢したの
だが、自分の家でもしこんな事を言われたら気分が悪くなるのは当
然だと思う。

「またあゝ冗談言つてえ、もうそろそろ時間だし帰ろうぜ！」

僕は彼氏では無いしお人好しでもないがこの雰囲気には耐えられず、
悪い空気を払拭するためにフォローをしたのだが……。

「嫌がらせかよ！ 俺がお前に何か悪いことでもしたのかよ！？
もういい帰れ」

（自分の家に霊的な存在がいるとか言われたら怒るのは当然だな）
その後、僕達三人は友人に追い出されるように部屋をあとにした。

あれから1ヶ月経ち、あの事もあったせいで僕達はお互いにぎくし
やくしながら日常生活をしていた。そんな時に友人から久々に飲み
に行こうと誘われた。断る理由も無いので僕は誘いに応じた。

夕方になり待ち合わせ場所である居酒屋に入ると隅の席から友人が
手を振りながら「おい、こっちだ！」と声高々に呼ばれた。どう
やら少し飲んでいたみたいで、少し出来上がっているようだ……。

僕はとりあえず椅子に腰を下ろして店員にビールを注文した。

店員が居なくなつて隼人が深刻そうに僕に向かって喋りだした。

「この前さあの子が俺の家で『この部屋いるかも』とか言ったの覚えてる？」

「あゝあれか気にするなよ、僕の家でも言つてたからアイツ。お前がキレたのはちよつとビックリしたけどさあ」

「真面目な話なんだけど、実は俺も聞こえてたんだよ女の声が引越し初日から……俺はそういうお化けとか信じたくなかったから思わずあの子に怒鳴つちやたんだよ」

「その話、本当!？」

「冗談と言いたいけど本当なんだ。しかもこの話には続きがあつて最近では姿が見えるんだよ！ しかもそれだけじゃない！ 夜中に物音はするわ、金縛りにあつわ、もう嫌になるよ……」

友人がそう言うのと店員に頼んだビールが来たようだ、冷えたビールをとりあえず一口飲んで友人を見る。

友人をよく見ると目の下に濃いクマが出来ていて、少し痩せているような気がする。店内の明かりが暗いせいか余計に隼人の顔色が良くないように見えた。そんな姿を見ても僕は友人の言っている事を信用出来なかつた。

「またあ幻覚とか幻聴の類じゃないのゝ、もしそれが事実だったら引越せばいいじゃん！」

「出来るなら俺もしてるよ」

「何で出来ないんだよ！ お前の家つて親が家賃払つてるんだろ？ 友人は僕の言葉を聞いて小さくため息をつくときれた顔をしながら喋りだした。

「お前さあ……親に言えるか『家に幽霊が出るから引越しさせて』つて」

「言えないな……」

「そつだろ！ 実は今日はお前に頼みがあつて誘つたんだ」

「幽霊が出るから、家に泊めてくれとか言つんじやないんだろつな？」

「……………お前がこの話を信じてくれなくても構わない。ただ俺はあの部屋に居たくないないんだ！ たのむ、お前の家に大学卒業まで住ませて欲しい」

「別にいいけど、家賃は取るぞ」

「ありがとう、感謝する」

僕の家に住むことになつた友人と僕は、友人の荷物を取りに例の幽霊が出る部屋に入った。

「まじで出るのかよ？ 雰囲気的に普通なような気がするけど」
霊の存在をまつたく信じていないので僕が見る友人の部屋は普通にしか見えなかつた。

「たしかに今は何とも無いけど、俺が一人の時は毎日のようにあいつがいるんだ……………」

僕達二人は会話ほどぼにして、荷物を簡単にまとめ僕の家に向かうことにした。

「お前の家つて久しぶりだな」

「狭いけど文句は言うなよ、いつでも追い出せる事もしつかりと忘れるなよ」

「分かつてるよ、本当に助かる」

玄関の扉を開けて電気をつけ、友人を呼ぶ。

「入って」

友人に入つてと呼びかけても友人は一步も動こうとしなかつた。

「どうしたんだよ！ 早く入れよ、虫が入ってくるだろ」

友人は玄関に立ったまま、怯えながら

「なっ、何で……何でお前がここにいるんだよおお！」
そう言つて友人は玄関に荷物を置いたまま、走つて何処かに行つてしまつた。

この部屋いるかも（後書き）

僕（主人公）の家には誰がいたのでしょうか……

小指探し(前書き)

2011/10/21 改稿

小指探し

「嘘ひょん！」

今日もまた『小指』をしていた。そしてまた薬指役の女の子が泣いた。

「ゴメンって！ 泣かなくてもいいじゃん」

友人が笑いながらも女の子を慰めている。

この頃は初対面の女の子達と遊ぶ時はよく『小指』をやっている。

『小指』とは小指役がゲームを進行して親指、人差し指、中指、薬指役の順に夢の世界に行ってもらい『小指』を探してもらおうというゲーム。ここまではいかにも怖そうなゲームなのだが、実際は薬指役の女の子を怖がらせるだけの心霊ドッキリみたいなものだ。

今日も『小指』未経験者と遊ぶ約束をしていた。

女の子達と合流して僕達は「面白い遊びがあるんだけどやろうよ！」といったものに誘う。

いつもの電灯が少ない公園について今から遊ぶ内容を女の子達に説明した。適当な事を言って嫌がる女の子達を『小指』に無理やり参加させた。怖がっている子から順に薬指役、中指役、人差し指役を決める。いつもは僕が小指役（司会者）なのだが、今日は親指役をやることになった。

友人はいつも通りに『小指』を進行する。

司会者の友人がルールの説明などを終えるといよいよゲームが始まる。「それでは『小指』始めます。親指役から順に夢の世界に行ってもらうので、親指役以外は僕が肩を叩くまで目を閉じて、下を向き、耳を塞いで下さい。」

皆が下を向いてのを確認すると友人が僕の耳元に小さな声で夢の世界に行くための魔法の呪文を唱える。

本当は魔法の呪文なんてものはないんだが……

「迫真の演技をヨロシク！」

友人が僕の耳元でそう言うと、いつも友人がしているように僕は気絶をしたフリをした。

女の子達の反応を見なくなってきた僕は、うつすらとばれないように目を開けた

おもわず僕は目を開けて、立ち上がった。

目を開けて見えたのはさっきまでいた薄暗い公園ではなく、一昔前の村。

空は真つ赤に染まり、地は僅かながらも雑草があちこち生え、両手で数えられるぐらいの藁わらで造られた家々

それはまさしく僕の頭の中で想像していた『小指』の『夢の世界』であつた……

僕が混乱しながら呆然と立っていた所、突然背中にチクツとした痛みがした。思わず後ろを見ようとした時『小指』のルールを思い出した。

“決して後ろを向いてはいけません。後ろを向いたら現世に戻れません”

もし後ろを向いたら……僕は……と考えたら恐怖で身を固めた。

また背中に小さな硬い何かが当たった、そして今度は声が聞こえた。

「お兄ちゃん、遊ぼうよお兄ちゃん、遊ぼうよお兄ちゃん、遊ぼうよお兄ちゃん、遊ぼうよ」

僕は何も言わずに声が聞こえたと同時にそこから逃げ出すように走り出した。

しばらく走り続けて僕はとうとう疲れきってその場に座り込んだ。

吐き出す息が止まらない。足の震えも疲れからの震えなのか、この世界での恐怖体験の震えなのかよく分からなかった。

とにかく逃げ切れたと安心していただ僕だったが、後ろからまたあの子の声が聞こえた。

「お兄ちゃんはまだ返さないから……」

僕は走り疲れた体に鞭を打って、また逃げ出した。

（もう嫌だ、いつになったらこの地獄から解放されるんだ）

そんな思いも虚しく、後ろからあの子が僕に向けて語りかける。

「逃げてても無駄だよ、だってここはお兄ちゃんが作った世界だから全身が恐怖で震えるのが分かる。逃げたいのに疲れと恐怖で動けない。背中には小さな小石や木の枝のような物が投げられているのが分かる。」

僕は目を閉じ考えた……『小指』だ。

この遊びを終わらせるには小指を見つければ、元の世界に戻る事ができる。そう思ったら体が軽くなった気がした。この恐怖に体が慣れてしまったのか、僕は目を開け小指を探しながらまた走り出した。走っても、走っても、走っても後ろにいるあの子の声が聞こえる。

「どうせ見つけられないよお、そんな事はやめて私と遊ぼうよ」

それでも僕は小指を探しながら必死に走って、走って、走った。

「……見つけた」

僕は見つけた小指を掴むと小指が消え、全ての景色が真っ暗になった。

すると突然後ろから何かに抱きつかれた！

思わず驚いて体がビクッと反応する。するとあの子の声が聞こえた。

「お兄ちゃんまた来てね！ 次は絶対に返さないからさ！」

「嘘ピヨ〜ン！」

友人の声がして、目を開けると女の子が泣いていた。
それはいつもと同じ『小指』の風景だった。

小指探し（後書き）

遊び半分でこつこつこつこつとをしていると痛い目にあいますよ

美人な彼女（前書き）

2011/10/20 改稿

美人な彼女

会社の同僚からの誘いで参加した合コンで彼女と知り合った。

彼女の容姿は一言で言うところ『美人』、小さな顔に大きい瞳綺麗な鼻などの完璧なパーツ達が黄金比率通りに配置され、その顔にこの体あり！と当然のように外人のようなスタイルな彼女。彼女と町ですれ違ったら間違いなく世の男性諸君は振り向くであろう。

僕は彼女を初めて見た瞬間に一目惚れした。高嶺の花のような彼女が僕みたいな平凡サラリーマンなんか相手にしないだろうと思いつつも、僕はアプローチせずにはいられなかった。

結果を言うと……彼女と付き合う事が出来た。僕が押しに押ししたら、時間はかかったが彼女と交際するまでこぎつけた。

彼女は外見だけではなく、中身もとても優しく僕には勿体無いぐらいの彼女で僕は本気で結婚を考えるようになった。僕が早く結婚したいという考えは彼女にも伝わっていたのか、付き合ってから僅か3週間で僕達は入籍届けを提出することが出来た。それからの結婚生活は順調で、それと同じく仕事も昇進して公私共にかなり順調のはずであった……。

昇進すれば当然忙しくなり、仕事が終わり帰る時間は毎晩深夜12時を回る。僕は奥さんのために必死に働いた。

今日は上司達と飲みに行き、深夜2時頃帰宅した。玄関の扉を開けると彼女が不機嫌そうに僕を見つめていた。

「なんで毎日こんなに帰るのが遅いの？ 最近はお酒もよく飲んでくるみたいだし」

「仕事だよ、疲れているから先に寝るね」

その日は彼女と軽い口論をした。

昨夜に彼女と口論したばかりにも関わらず上司達との付き合いでまた帰宅する時刻が遅くなってしまった。静かに玄関を開けるとやはり彼女は不機嫌そうな顔で僕を待っていた。

「あなた女の人の匂いがする。もしかして浮気してる？」

「ああ、今日は部長に誘われて、部長の奥さんがやっているスナックに行ったからじゃないの」

「そんなこと言って誤魔化さないでよ！ 浮気してるんでしょ！」

「してないよ！ くだいなあ〜何で仕事が忙しくて、お前がいるのに浮気しなきゃいけないんだよ」

僕は彼女と徐々に大きな喧嘩をした。浮気はしていないが結局スナック行つた僕が悪いと思つて謝つて終わる事になつたのだが……翌日から日に日に彼女は僕を束縛していった。

最初は浮気の事をまだ引きずっていると思つていたので全然問題無かつたのだが、今では1時間に一回は携帯の着信音が鳴り、携帯にでなければ会社に電話が掛かってくる。それでも、電話での束縛はなんとか我慢できた。

ある日、会社に『盗聴器、盗撮カメラ発見調査専門』の業者が入つて作業をしている時、僕は初めて彼女に対して恐怖を覚えた……

『ピツーーーーー！ ピツーーーーー！』

僕のスーツと鞆に反応したのだ、盗聴器発見器が。業者が僕の所持品を調べるとある物が出てきた。

「何だこれ!？」

「これは盗聴器ですね……見覚えがありますか？」

「すみません、全然無いです」

業者の人には覚えが無いと言つたが、正直僕は盗聴器を仕込んだ人物が誰か分かっていた。

(……………彼女だ。)

この日は仕事が終わってすぐに家に帰った。

「あなたは今日は早いね。それに何をしているの」

僕は急いで自分の荷物を纏めて、玄関に向かう。

「電話の束縛までは我慢できた、でも盗聴器はお前の性格を疑うわ！ お前とはもう離婚する。」

彼女が何かを言って泣き崩れていたが、僕はそれを無視して家から出て行った。

その後僕は携帯の彼女の番号は着信拒否して、番号を通知しないのも拒否設定にした。会社にも事情を話し、彼女からの連絡は拒否してもらおうようにした。離婚は弁護士の方に頼んでおいた。

彼女と別れてから1週間経ち、仕事が終わりに新しく住みだしたアパートに帰宅したのだが……

(鍵が開いている？ 鍵閉めたはずだったんだけど)
たぶん閉め忘れたんだろう。玄関のドアを開けると

『ジャーーーーー……………』

(ビクッ！)

少し驚いたが風呂場から水が流れ続けている音のようだ。

(誰がいるのか？もしかして彼女が来たのか？)

僕はゆっくりと風呂場の取っ手に手を近づけて、思いつき扉を開けた。

風呂場には誰もいなかった。

さっきの水の音はどうやら水道管が壊れていただけだった。安心し

た僕はとりあえず冷静になり水漏れを修理してくれる業者に電話した。

「お電話有難う御座います。水道トラブル 支店 が承ります。……もしもし、もしもし……お客さん聞こえますか？ もしもし」

僕は何かの紐で後ろから首を絞められていた。相手の姿は見えないがこの椿の香水の匂いは彼女のものだろう。

(彼女に殺されるんだ……)

恐怖は感じなかった。どこかで分かっていたんだと思う、あの執念深い彼女が来ることを。

僕は静かに目を閉じた。

意識が朦朧としながらも僕は目を開けた。

(ここは天国なのだろうか……?)

僕は首を絞められた事を思い出し、とつさに首に手を当てようとしたが両手が動かない、さらに両足も胴体も動かない。

首だけを動かし自分の体を確かめると自分の両手両足、胴など体のいたるところに手錠や鎖などの拘束器具がはめてある。僕が閉じ込められている部屋を見渡すと、目の前の扉から女性が入ってきた。

「あなた起きたの？ ご飯がもうすぐ出来るから待ってて」

僕は自分の状況を理解してとつさに叫ぶ

「誰かああ！ 助けてくれえー！」

「誰にも聞こえないよ、これから毎日幸せな二人の生活が始まるね」

美人な彼女（後書き）

外面も大事ですけど、内面も大事ですよね

飛び降り自殺（前書き）

2011/10/21 改稿

飛び降り自殺

この道を通るたび、あの人はビルの上から飛び降りる。

あの人の顔ははっきりとは見えないがいつも上下黒のスーツそして、飛び降りた先に行くにあの人はいなくなっている。

もう数え切れない回数飛び降りる彼を見ていたので最初ほどの驚きは無いが、今回は違った。

飛び降りているあの人が目があった。僕はあの人の事を知っていた。上下黒のスーツ、青色のネクタイ、黒縁メガネ。

あの人は僕だった。

そして思い出した……あの人は会社をリストラされ、家族には見放されて、自殺をした僕自身だ。

あの日から自分の自殺を何度も何度も見ている。

あと何回僕の自殺を見たら僕はこの地獄を終わらせれるのだろうか？

あっ！ また僕がビルの上から落ちてきた。

飛び降り自殺（後書き）

自殺をしてきた人達は永遠に自分の死亡する瞬間を見続けているのかもしれないですね

優良物件の隣人（前書き）

2011/10/21 改稿

優良物件の隣人

一階に四部屋、二階に四部屋の八部屋あるアパートで、周りは田んぼで囲まれている。駅から遠いがLDK風呂トイレ付きで家賃が二万六千円と激安でとても良い物件なんだが入居している住人はなぜか202号室の人と今日引越したばかりの203号室の僕だけだ。もしかして幽霊がでる物件だったりしてと考えてみるが、僕は幽霊とか信じてないし、たとえこのアパートで自殺者や死んだ人がいたとしても僕が気にすることはないのである。仮に幽霊が出るとしたら、会ってみたいと思うほどだ。

やっと引越しが終わって、隣人に挨拶をするために202号室のチャームを押した。

『ピンポーン』

「いないのかなあ？ でも電気はついてるし
もう一度鳴らしてみる

『ピンポーン』

「電気をつけっぱなしのまま、外出してるのかな？」

僕は挨拶はまた明日にでもしようと思い、自分の部屋に戻り風呂に入りベッドに潜り込んだのだが……

『ドン！ ドン！ ドン！』

寝始めて2時間ぐらいたった時、物音がうるさくて僕は体を起こした。時計を見ると深夜十二時を回っていた。

「こんな時間に勘弁してくれよ」

『ドン！ ドン！ ドン！』

僕は頭にきて玄関を出て、202号室のチャイムを鳴らした。

『ピンポーン』

「おいおい、無視かよ」

もう一度鳴らす。しばらく待っていても202号室の人が出てこないの、僕は少し大きな声で

「隣に引越してきた者ですが、物音がして寝れないので静かにしてもらえませんか」

と言ってしやうがなく自分の部屋に戻った。部屋に戻ると朝まで物音がすることはなかった。

今日は昨日の事もあり、隣人への挨拶はしなかった。

そして深夜、睡眠中にまた隣の部屋から物音が……

『ドン！ ドン！ ドン！ ドン！』

昨日よりも酷い物音が聞こえて、また起こされた。時計を見ると深夜3時、さすがにこの時間に起こされれば誰でも腹が立つと思う。

「マジでムカついた」

堪忍袋の緒が切れた僕は、急いで202号室に向かって今回はチャイムを鳴らさず、玄関の扉を殴るように三回叩き、大声で

「お前マジでいい加減にしろよ！ 出てこいや！」

『……………』

「はい無視ね。了解」

隣人に呆れた僕は部屋に戻り。携帯電話を取り出し管理人に電話をかけた……管理人と三十分ほど話し合い、二度とこんな事がないように202号室の隣人に注意してもらったことになった。

次の日の夜。

『ドン！ ドン！ ドン！』

また、隣から物音がする。今日、管理人に注意されたはずなんだが懲りていないようだ。僕はまた携帯を取り出し、管理人に電話をした。

「プルルルル、プルルルル、ガシャ」

「あのもし」只今留守にしております、ピーという発信音が鳴りましたらお客様の名前とご用件をお話下さい。『ピーーーーーー』……………

管理人の携帯は留守番電話になっていたので、用件だけ留守電に入れることにしたのだが、隣からの物音は未だに鳴り続けている。

『ドン！ ドン！ ドン！』

物音が止まる様子がないので僕は仕返しのつもりで、耳栓をしながらMDコンポの音量を最大限まで上げて音楽を一晚流し続けた。

翌日僕は目を覚まし、音楽を止めて耳栓を外した。

携帯を手にしてもう一度管理人に電話したが、留守電だった。携帯を切るとぐうーと腹の虫が鳴いたので冷蔵庫を開け、中身を物色した。

冷蔵庫の中は引越したてということもあり何も無かったので、僕はお腹を満たすためにコンビニに出かける事にした。

財布と携帯を持ちながら外に出て玄関を閉めた時、僕は驚きを隠せなかった……………

玄関のドアに赤色のスプレーで『死ぬ』『出て行け』『殺すぞ』などの言葉がドア一面を埋め尽くすように書かれていた。

「何だよ、コレ……」

(コレをやったのは絶対に202号のやつだ。どうせノックしても出ないのは分かっているからとりあえず管理人から電話がかかって来るのを待とう。)

いつまでも待つていても僕の腹の虫は待つてくれないので、いったんコンビニに出かけることにした。車の鍵を遠隔操作で開けようとしたその時、自分の車の異変に気が付き足を止めた。

僕の車は一晩の間に

タイヤが全てパンクし、ガラスは全て割れ、車の中には複数のゴミの山が……

かなりの変貌を遂げていたのだ。一分ぐらい硬直をした。

「ここまでやるかよ……もう限界だ。殺してやる！」

僕は隣人に対して殺意が湧き上がり、202号室に急いで向かった。ノックもせず鍵が閉まっているのにもかかわらず僕はドアノブを持ち、扉を無理やり開けようとする。

「お前がやつたんだろ！？ 分かっているんだ！ 殺してやるから今すぐ出て来い！」

僕は十分ぐらい大声を出しながら、202号室の扉を開けようとしたのだが扉が開くことはなかった。

大声を出して疲れた僕は警察に電話をかけるために自分の部屋に戻ることにした。

自宅の玄関の扉を開けた瞬間

『ガァン！』

僕の後頭部に激痛が走った！ それと同時に僕は倒れる。

意識が朦朧している中、誰かに引きずられていくのが分かった。

隣人の部屋に引きずられて、目線の先に頭から血を流している管理人を見つけるともう一度後頭部を何かで殴られ

僕は意識を落とした。

優良物件の隣人（後書き）

あなたの家の近くの隣人は大丈夫ですか

深夜のロンビニ(前書き)

2011/10/21 改稿

深夜のコンビニ

僕はアルバイトを転々として、今現在の勤め先は某大手チェーンのコンビニ店員。

店長は僕に対して

「深夜勤務の人達がすぐに辞めちゃうから助かるよ！ 期待しているから頑張ってね」

と優しくしてくれた。店長に丁寧に仕事を教えてもらいながら一ヶ月の研修期間が終了した。

深夜二十二時頃。

僕は夕方勤務の高校生二人組みから引き継いだ。今日は店長が急用があるとの事で、初めて一人つきりでの店番を任されたので頑張ろうと自分に言い聞かせた。

深夜一時頃。

やる事がまったくなくなつて、レジでぼーっと立っていると

『……ポト』

ポテトチップスが落ちた。僕は落ちた物を元の位置に戻して、レジに戻る。

『……ポト』

またポテトチップスが落ちた。今度はしっかりと落ちないように棚に戻して、レジに再び戻った。

深夜二時頃。

僕は棚にある商品の整理をしていて、下段の棚を整理しようとしてやがんだ時

『ガン！』

窓側から凄い音が聞こえて、慌てながら立ち上がって音が聞こえた所に視線を向けるが何も無い……。外に出て確認をしてみるが、何も無い……。

僕は白い息を吐きながら寒さに負け、両手で二の腕を摩りながら踵を返した。

（気味悪いな、帰りたいたいけど店を任せられているし）
考えれば考えるほど怖くなってきた僕は自分自身に勘違いだと言いつき聞かせ、まだ途中の仕事に没頭することにした。

深夜三時頃。

僕はトイレに行きたくなってきたのだが、さっきの事があつたあり僕はなかなかトイレに行くことが出来なかった。それでも人間の生理現象には逆らえない……我慢が出来なかった僕はトイレに駆け込む。

小便をしている途中、突然トイレの電気が消えた。

僕はパニックになり、思いつきり小便をぶちまけながらも小便を無理やり止めてトイレから急いで出た。

（なんなんだよ……）

再びトイレに入ってみると電気はついていたので、僕が汚してしまった便器を怯えながらも掃除した。

深夜四時頃。

僕はじつとする事が出来なくて、雑誌コーナーで立ち読みをしながら気を紛らわす事にした。

雑誌を読み終え違う雑誌に手をかけようとした時、店から約二十メートルぐらい離れた場所に赤い薄手のワンピースを着た女の人がい

た。
（真冬なのに何であんな格好をしているんだろう？　もしかして何かあつたのかな？）

そんな事を考えていると女の人が首だけを動かし、僕を見るといき

なり僕めがけて走り出した！

彼女が此方に近づくごとに、僕の体もどんどん硬直していく。

彼女は女性とは思えないもの凄いスピードで走ってきて、そのまま硝子にぶつかって倒れた。

僕は窓越しに倒れた彼女を見る。

彼女はすぐに目を開けて、僕に視線を向けると糸に引っ張られたかのようにすぐ立ち上がる。立ち上がった彼女は僕から視線を外すことなく、そのまま店の入り口に向かって歩き出した。

(動け！ 動け！ 動け！)

恐怖で動けない体に鞭を打って、僕は逃げるようにトイレに駆け込んだ。

トイレに入って、震える手で鍵を閉めると

『ピンポン、パンポン』

お客さんが入店時に鳴る音だけが店内に鳴り響いた。

(あいつが来た！？ どうすればいいんだ)

僕はパニックになりながらもトイレの中で息を殺した。

『コツ、コツ、コツ、コツ』

彼女の足音が聞こえ、彼女がトイレに近づいているのが分かる。

『コツ、コツ、コツ、コツ』

僕のトイレの前で、足音が止まった。

『……………ドン！ ドン！ ドン！ ドン！』

彼女が僕のトイレのドアを叩く

『ドン！ ドン！ ドン！……………』

彼女は諦めたのか、扉を叩くのを止めた。

『ガアン！ ガアン！ ガアン！』

今度はまるで体当たりしているような、比喩物にならない音がトイレ内に響き渡った。

僕は震えながら耳に両手を当てて

「僕が何をしたってんだよ！ 来るなあー！ー！ー！」

早朝五時頃。

パートの人が出勤して、すぐに深夜勤務の新人がいない事に気が付き、店を探し回りトイレの鍵が閉まっているのに気が付いたパートの人はノックをする。

ノックをしても返事が無いので、トイレの中で何かあったと思い119番に電話した。

救急車の他にレスキュー隊も来て、トイレのドアが開けられた……中に入っていた男性はトイレの便座の上で体育座りのまま耳を両手で塞ぎながら

「来るな、来るな、来るな、来るな、来るな」

と小さな声で何度も何度も呟いていた。

深夜のコンビニ（後書き）

深夜のコンビニって昼間と違って、全然雰囲気違いますよね
あなたの家の近くのコンビニでも様々な怪奇現象が起きているかも
しません

家の中の悪魔（前書き）

2011/10/21 改稿

家の中の悪魔

「僕にはお父さんがいない

僕にはお母さんもいない

僕の家には悪魔達しかいないんだ

悪魔達は何か気に食わない事があると

いつも僕のことを殴ったり蹴ったりするんだ

僕が殴られている姿を見て

悪魔達は喜んでるんだ

僕も抵抗した事はあるんだよ

一人で家を飛び出しておまわりさんに助けてもらおうとしたんだ

でも、おまわりさんは僕を相手にしてくれなかった

おまわりさんに連れられて、おうちに帰ってから悪魔達は本当に凄かった

殴るだけでは満足出来なかったのか『罰だ!』と言いながら僕の手と足の爪を全部取っちゃたんだ

一枚一枚じつくりと剥がされるたびに

僕は血と涙をいっぱい流した

それから悪魔達の遊びは日に日に凄くなっただ

僕の体中を包丁で切り刻んだり

僕が吐くまでご飯を食べさせたり

僕が気絶するまで首を絞めたり

毎日地獄だったんだ

だから僕は悪魔をやっつける事にしたんだ

僕は包丁を持って

寝ている悪魔達をやっつけたんだ

これで僕も悪魔の一員になってしまったけど

とっつてもうれしかった……………」

「そうか……………」

家の中の悪魔（後書き）

この話は「虐待」をテーマに書きました。

呪いのビデオ（前書き）

2011/10/21 改稿

呪いのビデオ

大学一年生の夏休みに僕達四人は一泊二日の京都旅行に行く事になった。

僕達四人は京都に着いてから観光を一日楽しみ、宿泊先の旅館に向かうことにした。旅館に着いた四人はカウンターでチェックインを済まして、着物を着た女性に部屋まで案内をされた。

案内後は温泉や食事を四人の仲間達とゆつくり楽しんだ。

食後四人が部屋でまったりしている時、一人が鞆から一本のビデオテープを取り出した。

「コレ持ってきたんだけど、皆で見ようぜ！」

「何それ？」

「聞いて驚くなよ、これは大学で噂になっていた例の『呪いのビデオ』だ！」

「面白そうじゃん！ 見ようぜ！」

温泉と食事以外やる事が無かったので、四人は『呪いのビデオ』を見ることにした。

テープをビデオデッキに入れ、再生ボタンを押すと……

『ピーーーーー』

そこに映っていたのは恐怖映像なんかではなく、誰もが見た事があるカラーバーが映し出されていた。

「何だよこれ！ カラーバーが映ってるだけじゃん！」

「そうだな……ちなみにこれを見るとどうなるんだ？」

「見たら死ぬらしんだけど……全然面白くないな」

「もう消そうぜ、つまんないし」

「そうだな」

テープを取り出し、テレビの電源を消した同時に僕は悲鳴を上げた。
「わあっ！」

テレビ画面越しに僕達と一緒に座っているはずのない五人目の男性と目が合った。慌てて後ろを振り向くがそこにいるのは友人三人だけ。

「見た？」

「えっ！？ 何を？」

「テレビに男の人が写っていただろ」

「見てないけど……」

「なんだよ、脅かそうとしてるのか？」

「いや、間違いないって！ お前のとなりに座ってたんだよ！」

「ワハハハハ！ 何だよそれ、全然恐くないぞ」

皆が僕を馬鹿にするように笑っている時、突然携帯が鳴った。僕は携帯を手に取り携帯画面を確認すると『公衆電話』と表示されていた。

（こんな時代に公衆電話？）

少し疑問を感じながらも僕は電話にでることにした。

「もしもし、どなたですか？」

「……………」

「もしもし、いたずら電話なら切りますけど」

「シネ。シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ」

僕は驚き携帯から手を離れた！ 携帯が床に落ちて、携帯から『シネ』という言葉が部屋中に響き渡る。

「シネシネシネシネシネ」

僕は慌てて携帯を取り、通話を切る。

「なんだよこれ……」

『ドン！ ドン！ ドン！』

天井、床、壁。上下左右から耳を塞ぎたくなるような激しい物音が鳴り響く。

僕達四人はお互い顔を見合わせると一斉に部屋から逃げようと玄関に向かって走り出した。

「何で開かないんだよ！」

「早く開けるよ！ 急げ！」

「だから、開かないんだって！」

四人はパニックになり混乱しながらも必死で扉を開けようとするが、扉はまるで頑丈な鍵でロックされたかのようにビクともしない。

『ガラガラガラガラ』

ベランダの方から扉が開いたような音がした。四人は動きを止め、視線を玄関の扉からベランダに向けてとそこには……

人。人。人。人。無数の人。

男性に女性、子供から老人などの無数の人達がベランダから入ってきた！

それらはまるで生気が無く、小声で呟きながら此方に向かってくる。

「シネシネシネシネシネシネ」

「おい！ 早く開ける！ あいつらが来る！」

僕達の願いが通じたのかやっと扉が開いた。四人は一斉に旅館の外に向かって走り出した

次の日旅館には彼らの荷物が残されたままだった。
あの『呪いのビデオ』と一緒に

呪いのビデオ（後書き）

呪いのビデオは今でもまだ

高収入アルバイト（前書き）

2011/10/21 改稿

高収入アルバイト

『1日で100万円！ 新薬のテスト1名限定募集！』
お金が無い僕はこの魅力的なアルバイトを求人サイトで見つけた。
僕は急いで携帯を取り出した

(さぶっ！)
あまりの寒さに僕は目を開けた。だが両手両足を固定されていて身動きが取れない。

(何でこんな所にいるんだろう？ しかもこんな姿で？)
僕は脳をフル回転させ、過去を振り返った。

(アルバイト当日に病院の手術室で酸素マスクをしてから、急に眠くなって……って嘘だろ？ 騙されたのか？ いや、まだ分からない。とりあえずここから出ないと！)

とりあえず、僕は首だけを動かして周りの様子を探ると、ここは沢山の生肉を冷凍保存している倉庫のように見えた。僕はそのまま近くにあった袋を目だけで確認した。

そこには『食肉(人手)』や『食肉(人足)』など他にも色々あり、一番驚いたのが『食肉(人間1頭)』
そこにあつたのは皮を剥がされた息をしていない人間だった。それを見た僕はお腹の中にあつた物を胃酸とともに吐き出した。

全てを吐き出し終わった僕は誰もいないであろう倉庫で一人虚しく叫んだ。

助けてくれ！ ここから出してくれ！と……

（僕は冷凍保存されている肉と同じ運命を辿るんだ）

次第僕の体は順々に感覚をなくして、僕は静かに目を閉じた。

高収入アルバイト（後書き）

おいしい話には気をつけてください

友人の葬式（前書き）

2011/10/21 改稿

友人の葬式

僕の友人が交通事故で亡くなって、葬式に呼ばれたので行く事になった。

僕は葬式中、とても悲しくて泣いていた。

まだ中学生の僕にとっては友人の死を簡単に割り切れるほど大人ではなかった。

お坊さんがお経を読みながら木魚を叩いていた時に聞き覚えがある声があった。

「く……ら……よお……」

あまりよく聞こえないので僕は集中して、耳を澄ました。

「暗い、暗い、暗いよお……」

今度は間違いなく聞こえた！ その声は紛れも無く僕の友人の声だった。

周りの人は反応していない？ 僕にしか聞こえていないのか！？

僕は怖くなって席を離れようとしたが親が「我慢しなさい！」と僕を引き止める。

僕も友人の声が聞こえるとは言えないので、我慢する事にした。

それでも僕だけには友人の悲しそうな声が聞こえ続けた。

「暗い、暗い、暗いよお……」と。

葬式が進んで、僕達は火葬場に向かった。

火葬場に友人が入っている棺が入れられ、火が点けられた。

すると

（熱い！ 熱い！ 熱いよお！）

また友人の声が聞こえてきた。

さすがに怖くなった僕はその場から今度こそは離れようとしたが、
また友人の声が聞こえた。

（なあ！ そこにいるんだろ！？ 助けてくれよお！ ここから出
してくれよ！ 親友だろ！？）

友人は間違いなく僕に助けを求めてきた。

僕は驚き、恐怖で竦む足を動かしてその場から逃げ出した。

友人の葬式（後書き）

日本はほとんどの人が死後、火葬されます
火葬される本人達は本当にそれを望んでいるのでしょうか

初ドラインプでの(前書き)

2011/8/18訂正

初ドライブでの

3週間の自動車免許の合宿を終え、自動車免許を取得した。僕は友人を誘いドライブに行く事になった。

「事故んなよお、俺まだ結婚もしてないし、まだ人生を謳歌してないから」

コイツは幼稚園の時から幼馴染であり、僕の数少ない友人である。「大丈夫だつて！ 骨はちゃんと拾うからさあ（笑）」

「コラア！ 死ぬ前提で話すな！」

お互いふざけあいながら夜の田舎道をドライブする。僕はたまたま見えた港に入る船を見た時、友人が大きな声で「ブレーキ！」と言った。

僕は港の船から視線を前に戻すと、目の前に40代ぐらいの男性と5歳ぐらいの女の子が道路を横断しながらコチラを見つめていた。

僕は慌てて急ブレーキを掛けたが同時に二人を轢いてしまった……あまりの衝撃にフロントガラスにひびが入った。

車を停めて僕と友人は車を降りた。友人はその二人の首筋に手を当てて、僕の方を見て静かに首を横に振った。

「どうしよう、まだ車の保険にも入ってないのに……俺このまま刑務所かな」

僕は二人の容態よりも自分がこれからどうなるかで頭がいっぱいになった。そんな様子の僕を友人が見て

「この二人埋めるぞ」

錯乱状態の僕は友人の指示に従い、車のトランクに二体の死体を入れた。その後車は友人が運転して、しばらく経つと誰も入らなそうな森に着いた。友人は森に着いてから地面を素手で掘り出した。僕も友人に言われるがまま地面を掘った。深さ1.5メートルの穴を掘って、友人は小さな声で

「ここに埋めるぞ、手伝え」

僕と友人は二体の死体をそこに埋めた。埋め終えたら洋一は僕に向かつて

「今日は何も無かった。俺もお前も何も見ていない。分かったな？」
僕はその言葉に静かにうなずいた……

二体の死体を埋め終えた僕達は、何も喋らず帰った。

あの事があった日から僕と洋一は会わなくなった。ただ僕は1年ぐらい、殺してしまったという恐怖と警察に見つかってしまうという恐怖に押し潰されそうになった。

ただ、人間は不思議な生き物である。たとえ人を殺したとしても時間が経てばある程度、罪悪感が薄れていく。

次第に僕は精神的に回復して、日常生活に戻りつつあった。

日常生活に戻って、会社に入り、結婚もして、子供も生まれ、家も買った。

あの日から10年も経った今は、あの日の事も忘れて幸せな生活を送っていたはずだったが、突然自宅に連絡が入った。

それは……

昔の友人が包丁で刺されて死亡したという連絡だった。連絡後、僕は家族を連れて友人の実家の近くの病院に向かった。病院についた僕はナースに案内してもらい、そこには洋一の母親と父親、警官2名。洋一の両親は号泣していて、警官が両親の代わりに僕に説明してくれた。

洋一が何者かに刺され、その後通りかかった人に発見されて病院に

着いた頃にはもう遅かったらしい。警官の説明後、友人の変わり果てた姿を見て僕は泣いた。泣き疲れた僕は嫁と娘と一緒に一旦帰る事にした。

帰り道の途中

車が故障したらしく、道路の脇に車が停まっかけていて50代ぐらいの人が助けを求めていたので僕は車を停めて声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「いやあ、ちよつと故障してしまつたので、近くの駅まで乗せてくれないですか」

僕はそのお願いに快くOKを出して、彼を助手席に乗ってもらつたとにした。

「こんな時間にこんな田舎に何か用があつたのですか？」

「娘がこの近くで事故に遭ひまして……今日はあの日からちよつと10年経つたので、花束を持って来たのですよ……」

「それはお気の毒に……余計な事を聞いてしまつてすいません」

「いや、いいんですよ！あの事故は私達の注意不足だったのですから。ただ、事故を起こした人間が今でもものうのうと私の目の前で生きてるのは許せないですけどね」

『プスッ』

そう言つて彼は僕の脇腹を刃物で刺した。

後ろで妻が叫んでいる。

車はガードレールを突き破り、崖から落ちていった……

初ドライブでの（後書き）

あなたは忘れかけている過去の過ちは無いですか？

ゲームを超えて(前書き)

2011/8/18訂正

ゲームを超えて

モンスターを狩っていくゲームがある。僕はそれだけでは物足りなくなつて、ネット通販でエアガンを改造した物やボウガン、サバイバルナイフなどを購入して近くの森にいる動物達を手当たり次第『狩り』をした。

まるでゲームを楽しむように……

近くの森だけではなく、民家が飼っている犬やペットショップ、動物園にも侵入して『狩り』をした。動物達が僕の手で死んでいくのを見るたびに僕は興奮していった。

今日もいつも通り『狩り』を終え、血まみれの衣服を脱ぎ風呂に入る。そしていつも通りにベッドに横になって目を閉じた。

僕は夢を見た。

今まで『狩り』をした動物達が傷だらけの体で僕を追いかけてくる。僕はただひたすらに逃げる夢。

(気分の悪い夢をみたな……)

僕は何も気にせずいつも通りに学校に向かった。学校から帰宅をした僕はまた『狩り』に向かう。それから僕は毎日、毎日同じ夢を見た。傷だらけの動物達が僕を追いかけてきて、僕はひたすら逃げる。捕まりそうになった瞬間に僕は夢から覚める。その夢が1ヶ月続いて、また同じ夢を見ていた時だった。

僕は夢の中で初めて動物達に捕まったのだ。

動物達は僕を捕まえると喜びながら僕に攻撃をしていった。まるで『狩り』を楽しむように……

僕の体は噛み付かれたり、食い千切られた。内臓は色々な動物に持つてかれて食べられ、僕の体の残り物は全てカラス達に食べられた。これはただの夢ではない。夢の中なのに痛みがあるのだ。あまりの痛みで叫びたいがのども食い千切られて、叫べない。動物達が僕を食べ終え、僕は夢から覚める。痛みは残っていないがもの凄い量の汗を掻いていた。

その日から僕は毎日、動物達に食べられる夢を見た。

夢の中なのに痛みがあり全て終わるまで夢から覚める事が出来ない、あまりの恐怖に僕は不眠症になった。不眠症になった僕を親が心配して、色々な医者に診てもらったが原因は分からずに、とうとう親は知り合いの紹介で僕を神社に連れていった。神社の人は僕を見て急いだ様子で他の人に

「今からお祓いをするぞ！　すぐに準備をしろ！」と言った。

その後すぐお祓いが始まり、お祓いが終わって

「もう安心して下さい。悪い霊は祓いました。今日からまた普段通りに生活が出来ますよ」

と言ったので両親は安心したらしく、僕を連れて自宅に帰宅した。

僕も少し体が軽くなった気がして、自分の部屋に入るとベッドに横になって1分もしないうちに爆睡した。

でも

またいつもと同じ

夢を見た

ゲームを超えて（後書き）

動物の恨みを買うような事をしていないですか？

深夜の校内プール（前書き）

2011/8/24訂正

深夜の校内プール

高校の夏休みに僕を含め友人達3人で深夜に近くの小学校のプールに忍び込んで遊ぶ事になり、深夜2時ぐらいに小学校のフェンスをよじ登り深夜のプールに忍び込んだ。3人ともプールに忍び込んだら、プルーサイドで服を脱いで水着姿になる。友人Aが着替え終えたと同時にプールに飛び込んだ。僕と友人Bも彼に続いてプールに飛び込む。

1時間ぐらい遊んで、僕が「もうそろそろ帰るか？」と言うと友人2人もそれに賛成して、僕達三人はプールから出ようとする。

僕と友人Bがプールから上がる。すると友人Aが騒ぎ出した……

「たたたた、たす、助けてくれええ！」

友人Aが溺れながら、僕達に助けを求めているが僕達が遊んでいた場所は小学校のプール、溺れるような場所では無い。僕はそのとき友人Aの悪ふざけだと思った。友人Bもそう思ったらしく

「つまんねえから早く上がれよ。帰るぞ！」

友人Bがそう言うにもかかわらず、未だにプールの中にいる友人Aは溺れながら僕達に助けを求めている……

そんな友人Aの姿を見てさすがに僕達二人は友人Aに何かあったのかと思う。満月だった月が雲に隠れていて、溺れているであろう友人Aの姿が薄っすらとしか見えない。僕の隣にいた友人Bは溺れている友人を助けに行くためにプールに飛び込んだ。その時ちょうど雲に隠れていた月が顔を出し、僕達がいるプールに光が射し込む。プールが月明かりに照らされて僕の目に映ったものは友人2人をプールに引きずり込もうとする

複数の手だった……

「こらああああ！ お前ら此処で何をしとるんじゃあ！」

その声は僕でも友人でもなく、学校にいた警備員。僕は慌ててその警備員に

「友人がプールに溺れているんです！ 助けて下さい！」

僕が友人達の方に指を指すと

友人二人はプールにうつぶせの状態で浮かんでいた。警備の人が急いでプールに飛び込み二人を助け出した。警備の人は助け出した後、救急車を呼び、救急車が学校に来て二人を乗せていった。

病院に着いた二人は一命を取り留める事が出来た……

僕は警察や学校や親にこつ酷く怒られたが実際にあつた事は話さなかつた。

誰も僕の言う事を信じないであろう

「複数の手が友人達を溺れさせた」って

深夜の校内プール（後書き）

プールでの事故って多いですよね

一人暮らし始めました(前書き)

2011/8/24 訂正

一人暮らし始めました

高校を卒業して、両親の反対振り切り地元からかなり離れた東京の大学に進学することになった。当然実家から通う事は出来ないの
一人暮らしをすることとなる。

私が一人暮らしすることになったマンションの近くには交番やスーパー、駅もあり立地に関しては申し分無い場所であった。当然、自分の娘が初めて一人暮らしするので親がしっかりとしたセキュリティがある所を選んでくれたので私自身も安心して暮らせる場所であった。

大学の入学式を終えて自宅でテレビを見ている時

『ザアーーーーーザアーーーーー』

と壁越しに何かを引きずるような音がした。少し不気味に思ったのだが、私はそこまで気にしなかった。
そして次も日も、またその次の日も

『ガサ、ガサ、ザアーーーーーザアーーーーー』

毎日毎日同じ時刻になると壁越しに物音がした。

引越してから2週間が経ち、私は部屋に絵を飾るために釘を壁に刺す事にした。私はハンマーを持って、思いつき釘を叩いた。

「ドン、ドン、ドン……」

部屋の壁は思ったよりも薄かったらしく、釘は壁の中に簡単に入っていたのだが

「ギヤアアアアアア！」

と男の声のような叫び声が聞こえて私は腰を抜かした。

私は床に激しく腰を強打して叫び声が出た、釘を刺した壁を見た。

釘を刺して、穴が空いた壁からゆっくりと血のような赤黒い液体が流れだした……

私は急いで携帯を取り、親に電話した。私はひたすら「助けて、助けて」と何回も親に言った。

私の親は急いで警察に連絡してくれたらしく、10分もしない内に私の部屋に警察官が来た。

それから私はショックで大学を辞めて、自宅に暮らすことになった。

しばらくして私が精神的に安定してから親があのことについて詳しく教えてくれた。

私が当時住んでいた隣の人は自分の部屋に穴を開けて、部屋と部屋の間を移動しながら私の部屋を盗聴していたらしい……

あの時は私が釘を刺した所にちょうど隣の人がいたらしく、その人の目を私が釘で刺してしまい死亡してしまっただけらしい。

あの『ザアーアーザアーアー』という物音は彼が部屋と部屋の間を移動している音だった……

それを聞いた私は恐怖に包まれた

一人暮らし始めました（後書き）

あなたも自分の部屋に居る時、物音しませんか？

同窓会に居ない人（前書き）

2011/8/25 訂正

同窓会に居ない人

今日は小学校の同級生達と同窓会。

同窓会は居酒屋を貸切、予定の時間になると一人また一人と小学校時代の同級生達が集まってきて「キヤー」とか「久しぶりい〜」や「元気？」などの同窓会ならではの会話が目立っていた。

今回の同窓会は先生が幹事をしていたので、時間になってから今回の参加者の人数を数えていた今日は小学生の同級生全員が参加することになっていて、参加人数は先生を含めて30人だった。先生は何度も人数の確認をしたが一人足りず、今この居酒屋にいるのは29人だ。先生は誰がいないか分からず、教え子達に誰がいないか聞いていたが教え子達も誰がいないか全然分からなかった……

同窓会は盛り上がり、二次会は皆でカラオケに行く事になった。カラオケに移動するために同窓会メンバーは電車で移動する事になった。

駅に着いてから同窓会メンバーはそれぞれ喋りながら電車を待っていた。すると誰かが

「向こうにいる人、ずうーとこつち睨んでない？」

同窓会メンバーほとんどにその声が聞こえて、反対側のホームに目を向ける。

たしかに反対側のホームには、黒いワンピースを着て長い黒髪の女性が此方を睨んでいた。

ほぼ全員がチラチラと女性を見ているのにもかかわらず、その女性は此方を睨み続けていた。

その時にアナウンスが流れた

「まもなく列車が通過します、黄色い線までお下がり下さい」
アナウンスが流れても女性は此方を睨み続けていた。300メートルぐらい先に電車が見えてきた時、女性が此方に向かって喋り出した。

「私の事を忘れましたか？」

女性はそう言っただけで通過列車に突っ込んだ。女性の体は列車に轢かれて、体がバラバラになった……

すると女性の首が同窓会メンバー側のホームに飛んできた。

女性の顔を見た時、先生を含めて同窓会メンバーの顔が恐怖で引き攣った。

女性は僕達と同じ小学校の卒業生で

先生と一緒にクラス全員でイジメて不登校になった子だった

同窓会に居ない人（後書き）

思い返して下さい。あなたも過去に傷つけた人がいませんか？

純粹な気持ち（前書き）

2011/8/25訂正

純粹な気持ち

最近僕に弟が出来た

産まれたばかりの弟は僕と違ってパパに似ている

ママが病院から帰って来た。とってもうれしい！

でもママが帰ってきてから

ママとパパは毎日毎日、弟と一緒にいる

僕は弟にママとパパを取られた

弟がいなくなればママとパパを取り返す事が出来る

僕は自分の枕を弟の顔に押し付けた

しばらくして弟は息をしなくなった

その後ママとパパはそんな弟を見つけて

いっぱい泣いた

僕もママとパパが泣いているのを見て泣いた

でも本当は僕とってもうれしかったんだ

だってこれからはママとパパは

ずっーーーーと僕のものだから

純粋な気持ち（後書き）

子供の純粋な気持ちって、時々怖いものがありますよね

生まれ変わっても親友でいられるよね(前書き)

2011/8/25訂正

生まれ変わっても親友でいられるよね

私には大好きな親友がいた。小中高と同じ学校。何をするのも常に一緒に行動していたし服や趣味も同じ、悩みなどがあれば親友同士で相談しあったりしてた。私はこれからもずーと二人は一緒だと思っただし、親友もそう思っていると思う。私は親友と一緒にいるのが楽しくて幸せで当たり前だと思った。

私と親友が高校三年生に進級した時にそれが崩れるとは全然思わなかった……

高校三年生に進級して初めて私と親友はクラスが別になった。私は初めて別々のクラスになって親友意外の女の子とも仲良くなっていた。親友と接する時間は前より減ったが、私と親友の関係は変わる事がなかったはずであった。私は隣の席の男の子と話すうちに、その男の子に惹かれていった。その人は誰にでも優しく接していて、私にも優しく接してくれた。

そんな彼の優しさに日に日に惹かれていく……

そんなある日

彼に放課後呼び出されて「付き合ってください」と告白されたのだ。彼は私の隣の席になってから私に好意を寄せていたらしい。私も彼の事は好きになっていたので「はい」と返事をした。

親友はそんな私達をあまり祝福はしてくれなかった。

付き合った時は「そうなの、おめでとう」って言うてくれたけど、目ではそう言うてなかった。

（なぜだろう？　なんで親友は一緒に喜んでくれないのだろう？）
と私は思った。

それから私と彼は放課後や休日を一緒に過ごしていた。その時間は始めての彼氏だったので私にとつて新鮮で楽しい時間だった。祝福してくれなかった親友とは正直あまり一緒に時間を過ごしたくなかった。付き合つてしばらくしてデート中に彼氏が

「大事な話があるんだ……俺好きな人出来たからお前とは終わりにしたいんだ」

私は思いっきり泣いた。泣いている私に「ごめん」と言つて彼氏はデート中に私を置いて帰つていった。突然すぎてどうする事も出来ない私は親友に電話をした。親友は私の話を聞いてくれた。今まで私から親友に対して距離を置いていたのに、そんな私を親友は慰めてくれる。私は申し訳なくて親友に泣きながら謝つて、親友もそれを許してくれた。

それから私達は元の関係に戻つた。

今日は親友が用があるから先に帰つててと言つたので、私は一人で帰る事になった。

授業が終わり皆帰る準備をしている時に私はお腹が痛くなったので急いで女子トイレに駆け込む……

トイレを済ませて教室に戻ろうとしたら、親友と元彼が廊下で話していた。私は親友に気付かれないようにトイレから二人の様子を覗く。

しばらくすると二人は手を繋いで帰つていった。私はあまりのショックでまともに立つていることが出来なかった。二人の姿が見えなくなつて、私の目から大量の涙が溢れた。

元彼の好きな人と言つていたのが親友だった事、ふられた事を知つていながらも私の元彼とそういう関係になつている親友に裏切られた事。悲しかったし、許せなかった。

次の日親友に問い詰めた。

「あなたが最初に私を裏切ったのよ！ 親友の私よりも男を選んで浮かれていたくせに！ 自業自得よ！」

親友は私にそう言っつて、どこかに行つてしまつた……

私は親友が憎くかつた

自分が相手にされなくなつたからつて、親友である私を裏切るなんて。

仕返ししてやる。大事なものを全て奪つてやる。

『私の頭と心の中が真っ黒になつた』

次の日私は元彼を呼び出して、元彼を包丁で刺し殺した。

その後親友の家に行き、親友の家族をみんな刺し殺した。

「ただいまあゝ」

どうやら帰つてきたようだ……

親友は私の血だらけの姿を見て逃げ出そうとした

もちろん逃がさない

彼女を突き飛ばして、包丁を彼女のお腹に刺す

彼女は激痛に顔を歪めながら包丁をお腹から抜き、私に刺した

お互いに意識が薄れていく

ああー私達生まれ変わったらまた元通り、ずうーと親友でいられるかなあ

生まれ変わっても親友でいられるよね（後書き）

女性の友人トラブルって結構重いすよね

主人公はあなた（前書き）

2011/8/25 訂正

主人公はあなた

深夜一時頃あなたはいつものように『小説を読もう』で小説を読み漁りながら煙草に手を伸ばす。煙草の箱を開け、中から煙草を取り出すために指を入れる。だが煙草はさつき吸ったのでどうやら最後のようだった……あなたはしょうがなく煙草を買いに行くために重い腰を上げ、財布を手に取り家を出る。

田舎町の深夜はあまり明かりが無く、とても気味が悪い。

田舎町を照らす明かりは信号のみでほとんどが走行中の自動車に徐行を促すためにある黄色の点滅信号だけだ。その黄色の点滅信号がよけいに道を気味悪くする。

徒歩十分のコンビニにわざわざ車で行く必要性が無いと思ったのだが、不気味な夜道を歩いていくほどあなたは車で行けばよかったと後悔する。

あなたは5分ぐらい歩いていたら時に男性の声があった。声につられてあなたは視線を向けた。暗くてはつきりとは見えないが10mぐらい先で男性と女性が抱きあっているようだ。こんな深夜に不謹慎だなあと思っただけでもあなたは視線を外さなかった。お互い体をゆっくりと離し、女性は右手で男性の首筋に何かをした……。すると、男性は首筋に両手を当てながらゆっくりと倒れる。

あなたは男性が倒れたのを見て、急いで二人の下に向かう。女性はあなたの存在に気付いて体をあなたの方に向ける、あなたは女性を見て足を止める。身長は160ぐらいで黒のロングヘアー、ジーンズの短パンまではよかった……

血でほぼ真っ赤に染めた白いシャツ、右手に握る包丁と思われる刃物。あなたは殺人事件の目撃者になってしまった。彼女は虚ろな目

であなたを見ながら、此方に歩いてくる。

とっさにあなたは振り返り、全速力で彼女がいない反対方向に向かって走り出す。必死に走りながら後ろの彼女を確認する。彼女はもの凄い形相であなたに向かって走っている。それを見てあなたは体に鞭を入れる。ほんのわずかだが彼女よりはあなたの方が足が速い。

あなたはとある駐車場の車の影に体を隠した。息を殺しながらあなたは彼女が通りすぎるのを待った。

『コツ、コツ、コツ、コツ』

彼女の足音が聞こえた。彼女は歩きながらあなたを探しているようだ。あなたは絶対に彼女に気付かれないため、息を止めた。

『コツ、コツ、コツ、コツ』

彼女の足音がだんだん小さくなった。どうやらあなたを完璧に見失っているようだ。あなたは彼女が離れていくのを確認してから、息を止めるのを止め、息を吸って吐き出した。

あなたはこれからどうするのかを考えていた。

「……………見つけた！」

後ろから声がして、急いで振り向くと彼女は刃物を握った右手を振りかぶっていた。あなたはとっさの判断で彼女に思いつきり体当たりをする。彼女は1mぐらい吹き飛び、まだ刃物は握ったままだ。あなたは彼女から刃物を奪い取るという行動を取らずにその場から離れるという行動を取った。

あなたは全速力で彼女から逃げ出した。

自宅のアパートに到着して自分の部屋に駆け込み、鍵を全て閉め、

部屋の明かりを消した。

あなたは自宅に戻れた事で緊張と恐怖から解放され、力が抜けて座り込んだ。

30秒ぐらいしてようやく思考も回復したのか携帯を手に取り、警察に連絡する事にした。

あなたは震えた手で1、1、0と打ち込み、最後に通話ボタンを押そうとした時に

『コツ、コツ、コツ、コツ、コツ、』

玄関越しに足音が聞こえる。

100%とは言い切れないが彼女の足音だろう。

あなたは無性に誰か確認したくなり、携帯を静かに床に置き玄関の覗き窓に目を近づける。

『コツ、コツ、コツ、コツ、コツ、』

長は160ぐらいで黒のロングヘア、ジーンズの短パン。そして血でぼぼ真っ赤に染めた白いシャツ、右手に握る包丁と思われる刃物。

(……………彼女だ！)

だが、あなたの部屋は知らないようでウロウロしている。しばらくすると彼女の足音も小さくなり、完全に気配が無くなった。どうやら諦めてくれたようだ……………あなたは安心して携帯を手にして警察に連絡した。あなたは警察に必死で説明しながら、ふと思った。

(彼女はいったいどこに向かったのか……………?)と

小説がここで終わってしまっている。

あなたは才手の無い小説を見たことに怒りを覚えた。

あなたは気付いた

この小説がまだ続いている事に

あなたはゆっくりとページの下にスクロールする。

彼女の行方、気になりませんか？

主人公はあなた（後書き）

こつこつ話を見てから後ろって見たくないですね……

あなたは振り向く勇氣はありますか

睡眠時遊行症（前書き）

2011/8/25訂正

睡眠時遊行症

僕は不思議な体験をする。

朝起きると僕の足の裏が真っ黒で、体のどこかには必ず小さな切り傷があり、パジャマには血痕がついている。そういう体験をするようになったのは高校を入学してからで、今日が3回目の体験であった。1回ぐらいならすぐに忘れそうなのだが、さすがに3回もなると怖くて仕方が無い。僕は親に相談して医者に見てもらうことにした。

病院に行き医者に診断してもらった結果、僕は睡眠時遊行症すいみんじゆうこうしょうだと診断された、俗に言う夢遊病だ。医者の説明での原因は興奮状態で睡眠したり精神的なストレスが多いとされているが、はっきりとした原因が分からない症状で、一応薬物治療が出来るらしい……僕は医者から薬をもらい、しばらくは様子を見てくださいと言われたので様子を見ることにした。だが僕の病気は治る事は無かった。

ある日僕の家うちに大学の先生が来た。

僕の親の知り合いで深夜、カメラで僕の事を色々調べたいと言うのだ。僕は始めは反対だったが、調べる事により治す方法が見つかるかもしれないと言われて渋々了承した。カメラの設置はトイレと風呂、親の寝室以外に計20個設置する事になった。しばらくして大学に呼ばれて僕と親は大学に向かった。

大学の先生は「コレを見てください」と言ってビデオを再生した。

(……僕の家だ)

そこに映っていた映像は僕が深夜にベッドの下から包丁を持って、外に出て行く映像だった。

僕は怖くなった。

包丁をあんな所に隠していた事なんて見覚えが無い。僕が朝パジャマについていた血痕は、包丁の件を考えたら恐ろしかった……
もしかして僕は深夜に誰かを殺しているのではないかと思っただけで先生に確認した。

先生は分からないので僕のパジャマと包丁についている血痕の血液検査を言った。その日の夕方、先生に血痕がついた服や包丁を渡した。先生は「明日には分かるので明日連絡します」と言われ、僕達家族は家に帰った。

もう時間も遅くなって、家族で食の進まない夕飯を食べて寝た。

次の日、僕が起床した時に異変に気がついた。パジャマが血痕だらけで、部屋が誰かに漁られたようにぐちゃぐちゃに荒らされていた。僕は急いで自分の部屋の異常を親に見てもらおうと親のもとに向かう。

階段を降りて僕は一瞬で固まる。

父と母が血だらけで床に倒れていたのだ……

その後の記憶は覚えていない。気が付いたら病院のベッドの上にいた。

あの後、大学の先生が家に血液鑑定を知らせるために家に来て僕達を発見したというのである。

それから僕はこの病院に連れて行かれたらしい……
しばらくして裁判をする事になり、僕が親を殺したのが分かった。

検察側の証拠で出したのは家に取り付けてあるビデオカメラ。
僕が深夜に起きて包丁を探して部屋中を漁り、一階に降りて僕が外に出ようとしたら親が止めようとして僕がキッチンにある包丁で刺し殺した映像がのこっていた。
病院の先生や大学の先生などの証言で無罪となったが、僕はどうでもよかった

僕に残されたのは自分の手で人を殺してしまった『現実』だけだから

10年たっても病気は治らず

僕は今でも精神病棟の鍵を閉められた一室で夜な夜な睡眠時遊行症を繰り返していた

睡眠時遊行症（後書き）

夢遊病の症状が出ている人を見つけても、止めようとしたり起こそうとしたりしてはいけません。過去に止めようとした親が殺されたという実話があるので……

路上生活者の過ち（前書き）

2011/8/25訂正

路上生活者の過ち

会社をリストラされ、女房には捨てられ、働く気も失せて貯金も無くなり路上生活。さすが10年もこういう生活をすれば慣れる。私はまだホームレスになったばかりの時はどうやって生活したらいいか分からずに盗みばかりしていた。

私が路頭に迷うようになったばかりの頃は稼ぎ方も分からず食事もまともに取れず、お腹が空き過ぎて公園の水で空腹を満たすのは当たり前前、それでも空腹を満たせない場合は公園にある雑草を食べる時だつてあつた。そんな時に無い知恵で思いついたのは、お墓に供えてある食べ物を持借する事だつた。

幽霊とか祟りなんか気にしてられなかつた。その時の私は死ぬか生きるかの瀬戸際だつたからしょうがないと思つていた。毎日お墓を回りながら供え物の食べ物やお酒、煙草などを盗む事でなんとか生活をする事が出来た。

今日も日課の盗みが終わり、いつものようにダンボールとビニールシートで作つた家で寝始めようとしていた時に

「わしのじゃ」

家の外から声が聞こえた。私の家は公園内に設置しているので声が聞こえるのは当たり前前なのだが、今日はいつもと違つた。こんな深夜に年寄りの声が聞こえるのもおかしいが、私の家に向かって言っているようだつた。

「かえせ、わしのじゃ」

また声が聞こえた。私はビニールシートを捲つて外の声の主を確認する。

暗闇に立っていたのは一人の老婆。微かな月明かりだつたので老婆の姿を目を凝らして見た。老婆はボロボロの布を纏つていたのは分かつたが、顔は前髪で隠れてよく見えない。仲間かと思つたがとり

あえず今は、私が寝るのに邪魔だったので何処かに行ってもらった。
にした。

「すいません、何の話ですか。時間も遅いので何処か行ってもらえますか」

「かえせ、わしのじゃ」

私が何を言ってもそれしか言わない。さすがに手を出すのは出来なかったので、私は家から出て自転車で違う町の墓場に行く事にした。戻ってきた時にはあの婆さんはいなくなるだろうと思っていた。

公園に帰ってきて、時計台を見ると時刻は深夜4時30分。少し明るい。

家に帰る前に少し離れた場所から、老婆がいるかどうかを確認した。もしいたら今度は力ずくでも何処かに行ってもらおうと思いつながらも確認をしたが居なかった。

どうやら何処かに行ってくれたらしい、私は安心して家の中に入り拾ってきた毛布で体を包んだ。

「かえせ、わしのじゃ」

眠気で意識がどんどん薄れていく時、また老婆の声がした。

私は頭にきてビニールシートに手をかけようとした時……

「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪つてやる」「末代まで祟つてやる」「絶対に逃がすものか」「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪つてやる」「末代まで祟つてやる」「絶対に逃がすものか」「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪つてやる」「末代まで祟つてやる」「絶対に逃がすものか」

今度は一人では無く、複数の人々がいる。彼らが言っている事に私は心当たりがあった。

私は恐怖で震える手でゆっくりとビニールシートを捲った。そこにいるのは人、人、人、人、数えきれない人。小さな公園が人でいっぱいになっていた。

ただの人ではない。今まで私が盗んできた墓の住人達だった。その事に気がついた私はショックで意識を失った。

しばらくすると、私は意識を戻した。

私はもう供え物には手を出す事を辞めた。

今では空缶や鉄くずを集めてお金に換えて生活を過ごす日常。

ただ

いまだに彼らは深夜、私の所に来て供え物を返してもらおうとする。

「かえせ、わしのじゃ」

路上生活者の過ち（後書き）

自業自得で罰当りな話ですが、今現在こついった人はいるんですよえ〜

Schatten (前書)

2011/8/25 訂正

Schatten

影とは物体や人などが、光の進行を遮る結果、壁や地面できる暗い領域である。これは一般論であり常識である。

バーでバイトをする事になり、帰宅をするのは当然深夜。バイトが終わりいつも通り鞆を片手に帰宅をする。しばらく歩いて、横断歩道で信号待ちをしている時……

一瞬、自分の影が僕と違う動きをしていたように見えた。あまりにも微妙なので勘違いだと思った僕は右手を上げてみる。影も僕の動きと同時に片手を上げる。

やっぱり勘違いでは無かった。

影は僕の片手と反対の手を上げている。

横断歩道の信号が青になったが僕は一步も足を動かす事が出来ずに立ち竦んでいる。影も僕と同じく立ち竦んでいた。どうする事も出来ない僕はとりあえず歩いてみた、影も僕と同じく歩き出す。

横断歩道を歩いている途中で突然影が激しく動き出した。

しばらく見ていると影は僕に対して何かを伝えようとしているように見えた。

影は両手を僕に向けて『止まれ』の合図を出しているようだ。

そんな影を僕は立ち止まり見ていると

「ブツーーーー！ キキツーーーーー！」

僕が後ろを振り返ると光に包まれ、気が付くと僕は宙を舞っていた

……
僕は地面に落ち、僕の視線の先にはトラックから人が降りて僕の方
に向かってくるのと

僕の影が踊り狂っているのが見えた。まるで喜んでいるかのように
踊り狂っていた。

僕はそれを見て、意識を落とした。

Schatten (後書き)

影は影でいることが嫌だったんでしょうか……

中古家具 スレッド (前書き)

2011/8/25 訂正

中古家具 ヘッド

中古家具店でクイーンサイズのベッドを購入してから、毎日のように悪夢に悩まされる。暗闇の中で僕が誰かに追われているかのように逃げる。ただひたすら走り、がむしゃらに走る。追ってくるものは何かは分からないのに、怯えながら逃げる。ひたすら走っている途中で跳ね上がるように起きる。太股、背中、胸、首筋、顔面が汗だらけでまるで本当に走った後のように汗で体を濡らしている。こんなことを毎日のように続けていけば当然寝れなくなる。

ある日会社から3ヶ月の出張命令が出て、僕は大阪に3ヶ月出張した。

主張先では毎日悪夢に悩まされる事は無かった。出張業務が終わる時には悪夢の事なんて頭に残っていなかった。

自宅に戻り一人で晩酌して少し酔っ払い、そのままベッドに倒れこむ。

……いつもと同じ夢だ

僕はいつもと同じように何かに追いかけられる、だが今日は何かに掴まれて

「寂しかった」と言われた所で目が覚める。

（あれ？ 体が動かない、金縛りか？）

いや、違う。これは金縛りではない。

体は微妙に動かせる。僕は首だけを起こして体を確認すると、ベッドから手と足が出て僕の体と固定している。それを見た時、左側に何か気配がした。

僕は恐る恐る首をゆっくり左に回す。

女性の顔の半分だけがベッドをすり抜け僕を見つめている。僕はそれを見て声を上げようとしたが、あまりの恐怖に声が出ない。しばらくすると女性はまだすり抜けていない部分の顔を全部出し切って、僕に

「寂しかった」

それから2週間の時が経ち、アパートの大家が部屋のベッドで死んでいる男を発見した。男は過労死として扱われ、その男の両親が遺品を整理する時に家具はまとめて売り払った。

そう、あのベッドは今でもどこかの中古家具店で販売されている

中古家具 ヘッド（後書き）

中古の家具を使ってはいないですか？ 人の魂は物にも宿るって言われていきます。

虐められっ子の願い 巻(前書き)

2011/8/25訂正

虐められっ子の願い 壱

僕は苛められている。眼鏡をかけて太っているだけ、たったそれだけで虐められ続けられていた。同級生の男子は僕の事を毎日「ブタ眼鏡」と罵りながら殴る蹴る、周りの人も見てみぬふり。

僕は恨んで、憎んで、そして呪った。

毎日殴られながらも心の中で「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」とずーと叫び続けた。そんなある日僕を苛めていた一人が通り魔に刺されて死亡したと先生から報告があった。僕以外のクラスメイトは皆泣いている。僕は正直嬉しかった。ずっと死んで欲しいと思っていたやつがやつと死んでくれたから、思わず顔が綻んでしまう。休み時間になって僕は苛めてくる男子達に呼び出されて、僕がさっきの先生の話の途中で笑っていた事がばれてまた彼らに殴られる。僕はまた心の中で「こいつらもアイツのように死んでくれ」と強く、強く願った。

僕の願いが通じたのか、一人また一人と僕のクラスメイトが減っていく。その度に僕は喜ぶ。

クラスメイト達は次は誰が居なくなってしまうのか怯えていて、皆自分の事で頭がいっぱいになり僕の虐めは無くなってきた。

ある日の休日、僕の自宅に警察が二人来た。僕の親が必死で僕を連れて行こうとする警察を止めようとしたが僕は「すぐに帰ってくるから」と言っって親を止め、車に乗り込み警察署に向かう。

ああこうなる事は分かっていた。

あいつらを殺したのは僕。あいつらの死ぬ間際の顔、次は自分の番

が来るかもしれないと怯える顔、それらを見るたびに僕は興奮しま
た殺しに行く。だが、まだ殺し足りない。この警官達は邪魔だ。
僕はナイフをポケットから取り出し二人を殺す。

警官二人から拳銃を奪い取り、学校に向かった。まだ終わっていない
続きをするために

虐められっ子の願い 吉（後書き）

今でも何処かで虐められている人がいて、彼のような行動をとるか
もしれないですね

家族の一員（前書き）

9 / 20 訂正終了。

家族の一員

私の家には父、母、私、犬の4人の家族がいた。

私が幼稚園に入園したばかりの時は本当は皆と遊びたかったけど、人見知りなせいで私は全然友達が出来なかった。家の隣の公園には毎日自分と同じ年の子達の遊び声が聞こえる。私の父はそんな私を見かねて犬を買ってきてくれた。毛並みが黒いので名前は『クロ』。友達がいない私は毎日毎日『クロ』と散歩したり、公園で遊んだりした。遊ぶ時も寝る時もいつも私のそばに『クロ』がいた。私とクロの関係は飼い主とペットの関係ではなくて、友人……いや、それ以上の関係であった。

小学生に入学してから『クロ』に興味を持った同い年の子が私に話しかけてくれて、私に初めて人の友達が出来た。『クロ』と一緒に過ごす時間は少しずつ減っていったけど、『クロ』には感謝していた。『クロ』がいなければ私に友達が出来なかったと思うから……。

小学四年生の夏、私の家に黒い服を着た男の人達がたくさん段ボールを持って押しかけてきた。その日からしばらくして黒い服を着た人にパパが連れて行かれた。ママは泣き叫び私は理由も分からず必死でママを慰める、『クロ』は男の人達が居なくなるまで吠えていた。

そこから毎日が地獄のような生活だった。今まで友達と思っていた子は私と遊ばなくなり、家には『死ぬ！』『出て行け！』などの落書きを書かれ、近所の人や商店街の人に数多くの嫌がらせを受ける日々。ある日学校から帰ると普段はあまり吠えない『クロ』が犬小屋から家の中に向かって吠えていた。私は何かあったと思い、

家に急いで入る。

『マ……ママ？』

ママは首に紐を巻きつけて、天井からぶら下がっていた。ママは自分で命を絶った……

育ててくれる人がいなくなった私は施設に預けられることになった。施設の人は私に『クロ』は飼えないと言ったので、私は必死に抵抗したが叶う事はなかった。施設に行く事になった当日、私は施設に行く前に『クロ』に別れを告げる事にした。

いつも遊んでいたはずの公園に行つて『クロ』に泣きながら

「もうクロとは一緒に住む事が出来なくなったの、ごめんね……」

私は『クロ』から離れようとしたけど、私についてこようとす。

私は泣きながら大きな声で

「クロ！ お座り！ 待て！」

この二つはクロの得意の技だ。まさかこんな時に使うことになるとは思わなかった。

『クロ』は座つて、舌を出しながら尻尾を振っている……

私はもの凄い罪悪感に襲われた。涙が止まらず「ごめんなさい」と一言言つてその場から離れる。

一週間後私は施設を飛び出して『クロ』に会いに行った。

三人を捨てた父。二人を捨てた母。一人を捨てた私。私には出来なかった……。

家族も同然だった『クロ』を捨てることなんて。

私はあの公園に着き『クロ』を見つけた。体は痩せすぎて骨と皮だけになっていてかなり弱っている状態だった。そんな姿になりながらも私の待てという指示に従っていたのだ。私は涙を流しながら「ごめんね、ごめんね……」と『クロ』の頭を撫でた。『クロ』は少しだけ尻尾を振って目を閉じ、動きを止めた

それから私は中高と卒業、就職もした。年齢も34歳になり、今では10歳年下の彼氏もいてももちろん将来も考えている。

そんなある日彼からプロポーズされた。私の返事は当然OK。プロポーズ後、彼が行きたい所があると言って私を助手席に乗せた。目的地に着いて彼が私に

「俺さあ、前に捨てられたんだよね……今度は捨てないよね？」

そこは公園だった

家族の一員（後書き）

日ごろあなたはペットに対してどう接していますか？

タイムカプセル「30歳の私へ」(前書き)

9/20訂正。

タイムカプセル「30歳の私へ」

今日は小学校の同級生達との同窓会。小学校の卒業式に埋めたタイムカプセルを開ける日でもある。

同級生達と久々に会って、お酒を飲みながら「あの時は」などの昔話を楽しんだ。その後、学校に行きいよいよタイムカプセルを掘り起こした。小学時代の先生が教え子達一人一人に未来の自分に宛てた手紙を渡していく。私も未来の自分に宛てた手紙を貰い、その手紙を見る。

「30歳の私へ（1枚目）」

私は元気になっていますか？

私は高校も大学も結構いい所に行けたよね？

大学を卒業してから弁護士になって、お仕事忙しいよね？

28歳になって将来を考えれる彼氏が出来たよね？

でも、その彼氏と結婚してはいけないよ！

だって…… 2枚目に続く」

私は驚いた。将来の夢であった弁護士までは当たってもそこまで驚かなかったが、28歳の件に関しては小学六年生では予想がつかないと思う。しかも当たっている。

そして結婚してはいけない？ なんで？ 私は恐る恐る二枚目の手

紙を見る……

「30歳の私へ（2枚目）」

さっきの続きが気になる？

本当に知りたい？

しょうがないなあ、教えてあげる

今付き合ってる彼氏ね、いっぱい~~~~~い

人殺してるの

だから結婚しないほうがいいよ

あと約束して欲しいの

別れるなんて絶対に言っちゃいけないよ

そんな事を言ったら彼が私を殺しちゃうから

約束だよ！

ここで手紙は終わっている。正直気味悪かったがあまり気にしない

ようにした。

元同級生達と別れてから、私は自宅のアパートに向かった。鍵を開けるとそこには料理をしている男性がいた。もちろん私の彼氏です。とても優しく結婚も考えている。

私は着替えながら冗談ばく彼氏にタイムカプセルの事を話した。

「今日ねえ、同窓会で小学校卒業の時に埋めたタイムカプセルを掘ったんだよ。それでね、私が書いた『30歳の私へ』という手紙に面白い事書いてあったんだ。今付き合っている彼氏はいっぱい人を殺しているから結婚してはダメなんだって。笑えるよねえ」

「何で分かった!? 調べたのか？」

彼が私の背中越しに低い声で問う。でも、私は声を出す事が出来ない。

部屋中が私の首から流れた血で真っ赤に染まっていた。

タイムカプセル「30歳の私へ」(後書き)

あなたはタイムカプセルに何を入れましたか？
……手紙ですか？

オアシスを求めて（前書き）

9 / 21 訂正

オアシスを求めて

歩いてても、歩いてても砂と岩しかない。

あまりの暑さに無意識に中身の無いペットボトルを口につけ、ペットボトルを傾ける。

僕このままだと死ぬのかな……

今回の旅行は失敗した。レンタカーを借りて約一〇〇〇万k?あるサハラ砂漠の様々な町を回りながら観光を楽しむはずであったが、途中で車が故障し今に至る。しばらく歩けばどこかの町に辿り着くはずと思っていたが自分の考えは甘くかった。いつまで経っても町や人を見つけないことが出来ない、完璧に遭難していた。

砂漠で遭難してから一週間経ち、手持ちの水は2日前に切れた。意識は朦朧として、無い力を出して右左右左と足を動かしていた。自分の死のある程度覚悟している時、約100M先に見つけた……オアシスだ。

僕は無い力を振り絞り走った

それから2日後近くを通った遊牧民に発見され、日本に帰国することになった。某有名企業の社長ということもあり大々的に記者会見をして、様々なニュースや雑誌に取り上げられた。

会見後自宅に帰宅して、時間も遅かったためベッドに横になった。

翌朝あまりの暑さに寝苦しくて起きた。真夏にクーラーも点けずに寝てしまったためだろう。

体を起こして冷蔵庫に向かいミネラルウォーター手に取り、飲む

「ゴホッ! ゴホッ!」

僕が飲んでいた水が砂になっていた。驚いてペットボトルを落とすと、さっきまで砂だったのが水に戻っていた。

たぶんあんなことがあったので、疲れて幻覚を見てしまったのである……

とりあえず床にこぼした水を雑巾で拭き、シャワーを浴びるために風呂場に行く。お湯を溜めるために蛇口を捻り、お湯が溜まる間に体を洗う。そして全身泡だらけの体を洗い流すためにシャワーを出した時。

ザーザーと出てきたのは水ではなく砂、砂、大量の砂。慌ててシャワーを止め、視線を湯船に向けるとそこに溜まっていたものはやはり『砂』であった。そして、周りにある物全てが砂に変わっていく

そこで目が覚めた

今寝転んでいる所はさっきまでいた砂漠であった

「ゆ……め……か……」

オアシスを求めて（後書き）

今のあなたはまだ夢の中かも知れないですね

同棲生活『彼女との日常』(前書き)

9 / 21 訂正

同棲生活『彼女との日常』

「おはよう、今からご飯作るね」

僕が彼女と同棲してもうしばらく経つ。誰よりも美しく、誰よりも素敵で、誰よりも完璧な彼女。

「今日は残業で遅くなるから外で食べてくるね。行って来ます！」
家を出る前に彼女と口づけを交わし、彼女との別れを惜しみながらも会社に向かった。

やっと仕事が終わって、帰宅する。

「ただいま、まだご飯食べてないの？」

彼女は一切返事をしないが、そのままソファーに座り込む。

「今日会社でさあ」

テレビを見ながら、彼女に今日の出来事を楽しく話す僕。

「一緒にお風呂入るっか？」

僕は彼女を抱きかかえて、風呂場に行く。

「はあ〜気持ちいいね、今日は気分がいいから頭洗ってあげる」

シャンプーを彼女の頭につけて泡立てる。お湯で頭を流してあげてお風呂を出た。

お互い髪を乾かして、ベッドに入る。

「おやすみ、愛しているよ」

毎日必ず交わしているおやすみの口づけをし、彼女を抱きしめ顔を閉じた……

『ピンポン』

「は〜い！ どなたですか？」

「　　だ。殺人罪の容疑で逮捕する、逮捕状もある」

僕は彼女に「大丈夫だ、心配しないでいいから」と言っ、手錠を

かけられたまま警察の人と一緒に部屋を出る。

彼女を一人つきりにしてしまった。

彼女は家事が全然出来ないけど大丈夫なのだろうか……

首から下が無い彼女は静かに此方を見つめていた

同棲生活『彼女との日常』(後書き)

あなたの恋人はあなたに対して異常な愛情を持っていませんか？

虐められっ子の願い 弐(前書き)

9 / 21 訂正

虐められっ子の願い 貳

彼の外見は低身長、デブ、眼鏡。中身は人見知りで協調性がなく、いつもクラスの隅で読書を嗜んでいる。クラスで騒ぎまわっている男子グループからしてみれば、虐めの標的の的になるのは想像がつかくと思う。当然彼は私の隣で虐められている。

真面目で学級委員長という立場の私はいつも彼らの虐めを止める。

「先生のに言いますよ！」と言えば彼らはつまらなそうな顔をして何処かに行ってしまう。

本当は私はこの役はあまり好いていない。なぜなら、私も虐めの標的になりたくないという思いと彼の態度だ。

彼は虐められているのに抵抗をせず、助けも求めない。暴力や恐喝など非人道的な行為をいくらされても絶対に抵抗をしない。そんな彼を私は好きにはなれなかった。

しばらくしてからこの虐めがクラスで問題になり授業一時間分の時間を使って話し合う事になった。私が先生に今のクラスの現状を伝えて、話し合うように提案したのだ。

先生を含めクラス全員で話あった結果、要約すると虐めを止めようという方向になったのだが……

時間が経てばクラスメイトは話し合いの事を忘れ、また虐めだした。学級委員長という立場である私は毎日のように彼に対する虐めを止める。虐めを止める度に彼に対して怒りという感情が大きくなっていった。

『何で、抵抗しようとしなのかと』

私は彼を呼び出して、思いの丈を全てぶつけた。すると彼は小さな声で

「気持ちいいから……だからもう止めなくていい、正直迷惑で邪魔」

と。

私は彼が言っていることを理解する事が出来なかった。彼の事が気味悪くなって、彼に何も言わず早々とその場を離れた。そんな事があっても毎日私は彼に対する虐めを止めようとした。

ある日学校に行き、上履きに履き替えるために下駄箱を開けるとそこには虫の屍骸でいっぱいになっていた……。

あまりの出来事に唾然としていたら、後ろに気配がした。後ろを振り向くとそこには虐められていたあの彼がいた。彼はにんまりしながら口を開けた。

「仲間入りだね。これから気持ちいい毎日が委員長を待ってるよ、すぐに分かるさ」

彼はにやにやしながらその場を離れていった。

虐められっ子の願い 弐（後書き）

虐められっ子〓不幸、可哀相ではなく、虐められっ子〓興奮、快感
っていう人もいるかもしれないですね。

今日のあなた（前書き）

9 / 21 訂正

今日のあなた

今朝、宛名の無いメールが携帯に一通届いた。それは題名に「今日のあなた」と書いてあるメールで、本文には僕に起きる今日一日の出来事が事細かに書かれている。スパムメールだと思っていただけだが、中身を確認すると僕が何時に起きて何時に寝るとか、何時に先生に居眠りを注意されるだとか、今日僕の身に起きるであろう出来事が本当に細かく書いてあった。気味が悪いのだが僕は気にすることをやめて、学校に向かうことにした。

授業中僕は先生に居眠りを注意されて、僕はあの一通の宛名の無いメール「今日のあなた」を思い出した。休憩時間になってすぐに携帯を確認したら、あのメールの内容が完璧に当たっていたのだ……

「時 分授業中居眠りをしている最中に先生に殴られて注意を受ける」

僕は気味が悪くなり、急いでアドレスを変更した。

翌日携帯を開くと待ち受け画面に「新着メール 1件」と表示されていた。まだ誰にも教えていないはずのメールアドレスにメールが届いている。

僕は恐る恐る新着メールを開くとそこには宛名の無いメールそして題名には「今日のあなた」と。

僕は怖くなって携帯の電源を落とした。少し時間が経ち僕はやっと冷静になってきた時、ある事を思いついた。このメールを有効活用出来ないかと……

それから僕の日常が大きく変化した。一日に起こりうるあらゆる事を教えてくれるメールのおかげで、僕に起こる不幸を回避できるようになったのだ。僕は漫画の主人公になったかのように一日一日を

謳歌していた。

それから三ヶ月したある日

朝起きて、日課の新着メールのチェックをする。もちろんそこには「今日のあなた」と題名に書いてある宛名の無いメールが一通。

『06時00分 起床

06時05分 メールを確認

06時06分 パソコンでくも膜下出血を調べる

06時15分 くも膜下出血により頭痛が始まる

06時30分 呼吸が止まり死亡』

(死亡……!?)

僕は急いでパソコンの電源を点け、『くも膜下出血』を調べる。パソコンには

『くも膜下出血「症状」 くも膜下出血の特徴は強い頭痛です。突然いまままでに経験したことのないような頭痛が始まります。これに先だって、がくと脱力発作を起こすこともあります。痛みは始まると朝も晩も同じ強さで続きます。

多くの場合にはただちに意識障害が進行し、1時間以内に呼吸がとまることもあります』

(嘘だ……。)僕はまだ十代なのにこんな病気で死んでしまう事が信じられなかった。

ただ、この「今日のあなた」と書かれたメールの内容は一度も外れたことがなかった。

ベッドに置いてあるデジタル時計を見るともう時刻は06時14分41秒……

42、43、44、45とデジタル時計の秒数が進んでいく。

まるで僕の死のカウントダウンをしているかのように

5
5,
5
6,
5
7,
5
8,
5
9
.....

今日のあなた（後書き）

あなたにも届くかもしれないですね『今日のあなた』が

私には見えるの 巻（前書き）

9 / 21 訂正

私には見えるの 壱

初めて見えるようになったのは高校三年生の夏

高校三年生の夏はこれからの人生の岐路を選ぶもつとも重要な時期で、私も他の高校生達と同じく将来について色々悩んでいるような普通な女子高生だった。あれこれ考えているうちに夏休みに入つて、気晴らしに男子を含む友人達と近くのプールに遊ぶ事になった。

プールで遊び終えた私達は男子の提案で近くの廃校に肝試しに行く事にした。廃校の中はまだ昼間にも関わらず薄暗い、私も一応女子という立場から「コワイ」など言つて他の女子達にまざつて怖がつた振りをしていた。正直私は幽霊みたいな非科学的な存在を信じていない、なのでこういう場所に来て何が面白いのかと醒めていた。

しばらく皆と歩いていたら少し離れた教室の前に白い服を着ている女の人が立っていた。私は驚き、友人達に「あの人誰？」と聞いたが他の人達は「何が？」とか「怖がらせるなよ〜！」だとか言われて、私は逆に友人達が私を脅かそうとしているのかと思つていたがその女の人にどんだん近づいているのに友人達は本当に見えていない事が分かった。私にだけしか見えてない……

そんな事を考えていたら、その女の人の目が合った。

女の人は私と目を合わせると私達に対して睨むように目を細め、ゆつくりと口を開け、そして音の無い声を出した。私は恐怖で体を固め、その女の人を見ることしか出来なかった。その女の人が何て言っているか聞こえないのだが、その女の人を見続けていた私は口の動きで何を言っているのか分かった……

「ここにははいらない」

結局、私の顔色が悪いのを心配してくれた友人が肝試しを中断してくれたためその教室に入ること無く帰宅する事になった。

あの教室には何かがあるのか？　そしてあの女の人は誰なのか？　今でも分からない。

そしてあの日から私には死後彷徨える者達が見えるようになってしまった。

私には見えるの 壱（後書き）

口パクで喋る幽霊って想像したら怖くないですか

理科室の障(前書き)

9 / 21 訂正

理科室の噂

最近、僕の中学校で殺人事件が起きた

殺人事件後一週間休校となつてから今日は久々の登校日。教室に入ると、誰もがあの殺人事件の事を話している。そんな様子を席に座りながら眺めていたら、友人が僕の隣に座った。

「まだ先生を殺した犯人が捕まってないんだって」

友人の言う通りまだあの殺人事件の犯人は捕まっていない……

「俺の親父の知り合いが警察で働いててさあ、その人が言うには不可解な事が多すぎて全然捜査が進んでないらしいよ」

「不可解な事って？」

「しらねえ、そこまで詳しくは教えてくれなかった。あつ！人体模型が血塗れだったらしいよ」

「どこの学校の怪談だよ！」

友人に軽くツツコミをして、チャイムが鳴る。

学校では先生達もあの殺人事件についてはあまり触れず、「帰宅する時は必ず二人以上で帰るように」とHRで注意を受け、皆自宅に帰宅した。

久々の登校から1ヶ月するとある噂が学校を賑わせていた。

『理科室の人体模型が先生を殺した』

噂が回れば回るほど、どんどん悪化していく

深夜2時を回ると理科室の人体模型が動き出すのだ、太陽が沈むと人体模型が喋りだすのだ……本当にくだらないのだが、好奇心旺盛な友人は違った。

「今日の深夜、噂を確かめる為に学校に忍び込まねえ？」

「嫌だよ、めんどくさい」

「お前も気になんねえ？ 学校の噂」

この後、押しの弱い僕は友人の誘いを断れず渋々了承することになった。

そして深夜

「深夜の学校ってテンション上がるよな！」

たしかに友人が言っているように僕も中学男子のはしくれ、少しテンションが上がっていた。

そうして僕達二人はいつも鍵が開いている裏口から学校に侵入した。学校の外は外灯が少しあり多少周りの景色が見えていたが、深夜の学校は日本中で流行っている節電の影響を受けて豆電球すらついていない。なので校舎の中は月明かりでぼんやりと見える程度だ。僕と友人は懐中電灯のスイッチをオンにして学校の廊下に光を射しながら廊下を進んでいった。

しばらく歩いて、やっと目的の場所に着いた。

理科室の扉には『立ち入り禁止』と黒文字で書かれている白い画用紙が貼られていた。すると友人がポケットから鍵を取り出した。

「今日の放課後に職員室から借りてきた、開けるぞ」

「借りてきたって……盗んできたの間違いだろ！」

僕のツツコミを無視して、友人が立ち入り禁止の扉を開けた。理科室を懐中電灯で灯すとそこにはよく刑事ドラマとかで見る死体の跡にそって置かれている白い紐や証拠品の場所を指す番号が書いてある看板などは無く、綺麗に掃除されていた理科室であった。

「おいっ！ 人体模型あつたぞ！」

友人が人体模型に近づいていく。そこには以前からある理科室の人体模型であった。友人は懐中電灯の光を人体模型の顔に当てながら、動かない人体模型に対して

「つまんね〜な！ 動けよ！」
「もういいだろ、帰ろうぜ」

僕は踵を返して理科室を出ようとした時、友人が隣にいない事に気がつき後ろに振り向いて懐中電灯の光を友人の足からゆっくりと上にあげるとそこには目が虚ろな友人が体を痙攣させながら立っていた。光の先を友人から少しずらすと友人の首に噛みついていて人体模型がいた……

足が竦んで僕は一步も動く事が出来なくて、友人が力尽きていく姿を見ることしか出来なかった。人体模型はまるで食事を楽しんでいるように友人のいろんな部分の肉を食べている。

まるで“自分に足りない部分”を補うかのように

食事に満足したのか、友人を食べ終えた人体模型は自分の元にあった場所に帰り動かなくなった。

全然動けなかった僕の足はやっと動いたかと思うと一気にお腹にあるものを全て吐き出した。なんとか落ち着いた僕は懐中電灯の光に頼りながら廊下を走り出した

あの後警察に色々と事情聴取されたのだが、僕がいくら人体模型が人を食べたって言っても誰も信じてくれなかった。

あの日からしばらく経ったが、未だに理科室には親友を殺した人体模型が置かれている。

理科室の噂（後書き）

あなたの学校にも自分に足りない部分を補おうとしている彼がいる
かもしれないですね……

プレイボーイの手口(前書き)

9 / 21 訂正

プレイボーイの手口

ある都会の某クラブでとある男性がいた。その男性の容姿はそこそこ整っていて、今日もいつものように気になる女性に声をかけていつもの場所に向かっていた。彼はいつも気になる女性を見つけると声をかけて、その女性と二人きりで謎の自殺を遂げたある俳優の屋敷周辺を散歩する。そして謎の屋敷を通り過ぎると彼は

「何も感じなかった？　ここがさっき話していた屋敷なんだけど」
そういうとほとんどの女性が怖がって彼の腕にしがみつくと、
「そうして彼は女性に対して」

「大丈夫、俺が守ってやるから」
と言い、そのままホテルに連れ込む。そう、これが彼のやり口。

そうして、いつものように屋敷の前を通り過ぎ彼が口を開けようとした時女性が

「なんか錆び臭くない？」

「工事かなんかあったんじゃないの？」

「違うよ！　生臭いっていうか、まるで血の匂いみたい……」

女性がそういうと、少し離れた所から丸い何か近づいてくる。生首だ。女性はその生首を見つけたと同時に大声を出しながら何処かに走りだしてしまった……

対して彼は恐怖で身を固め、声は出さず、足が竦んで逃げることが出来ない。

生首と彼の距離が１メートルぐらいになると彼に向かって

「何故、いつも私を捜しているんだ！　何故だ！」

そう言った後、彼に向かって襲いかかってきた。その生首は彼の太ももに噛みつくくと彼は慌てて自分の拳で殴りながら振り払おうとしたが、生首は離れてくれない。

そうして彼は痛みと恐怖で失神してしまった。

翌日彼が目を覚ますと道路の上。

彼は夢かと思い、自分の太ももを確認するとそこにはしっかりと歯形が残っていた。それを見たと同時に他にも痛みを感じて、自分の体を確認する。

すると首、手、腕、腹、脛、足とそれぞれ違う歯形を6種類発見した。そして自分の目では確認出来ないが背中にも複数の痛みを感じた……

プレイボーイの手口(後書き)

寝ている間に彼はいくつの生首に噛まれたのやら

私には見えるの 弐(前書き)

9 / 21 訂正

私には見えるの 式

私は高校三年のあの夏の日から世間でいう『幽霊』というものが見えるようになってしまった。あの日から毎日のように『彼ら』は私の前に姿を現す。それは守護霊の時もあるが、一番私を苦しめたのがこの世に未練を残してしまった幽霊達であった……

高校を卒業して大学に進学をした大学で新しい友達が出来て、私はそれなりに満足していた。でも私にしか見えないもの 死後彷徨える者達 に関しては誰にも教えていなかった。

ほとんどの人には守護霊のような霊が一人後ろについている。道を歩く人々の後ろについている守護霊達を初めて見た時は私も怖くなくなってしまったほどだ。前後左右どこを見ても幽霊だらけのこの世の中に嫌気がさして外出が出来なくなった時期もあったが、今となってはそれも慣れて幽霊だらけの世界に何も感じなくなっていた。そして私の前にいる女友達の後ろにも守護霊がついていた。

大学の生活にもだいたい慣れてきたある日、いつものように友人が私と会話をしようと近づいてきた。私はすぐに彼女の異変に気がついた。後ろにいる霊がいつもの守護霊ではなかったのだ。その霊はまるで彼女を恨んでいるような眼差しで睨み続けていた。彼女に対して「いつもと守護霊違うんだけど、何かあった？」とは聞けず、いつものように彼女とどうつてことない会話を楽しんだ。

その次の日、また彼女が私に近づいてくる。……増えている。彼女を睨む霊が一人増えていたのだ。

そしてまた次の日と日を追うごと一人また一人と霊が増えていく。そしてその霊達が約10人ぐらいになった時、さすがに我慢が出来なかった私は彼女に聞く事にした。

「最近何かあった？」と。そして私は全て理解する事ができた。彼女は大学に進学をしたと同時にキャバクラでバイトを始めたのだと言う。

私の予想だと後ろにいる霊達は……だろう。

しばらくして、彼女はキャバクラの常連客に金銭トラブルで首を絞められ殺害された。

彼女が殺されてしまったのは後ろにいた霊達の仕業なのかは私には分からない

私には見えるの 弐(後書き)

あなたの後ろにいる人は大丈夫ですかね

遊戯『かくれんぼ』へ200文字小説〈前書き〉

200文字小説にチャレンジしました。

遊戯『かくれんぼ』〈200文字小説〉

絶好の場所に私は隠れている。

(もういいよ!)

私は友達が私を捜している姿を隠れながら見ている。

(私は目の前にいるのに、何で見つけられないんだろ？ ちよっと可笑しい)

「もう暗くなるから、早くお家に帰るよ!」

「分かった! それより今日の晩御飯は何を作ったの?」

(帰らないでよ! まだ私を見つけてないでしょ!)

私の心の声もむなしく、友達は母親と手を繋ぎ帰宅していく……

(私はお墓の中にいるんだよ! 早くみつけてよ!)

遊戯『かくれんぼ』〈200文字小説〉（後書き）

彼女はいつになったら見つけてもらえるのでしょうか……

簡単調理教室へ200文字小説〈前書き〉

また200文字小説です。短いので二話連続投稿しました。

今回は少し明るめのホラーです。

簡単調理教室へ200文字小説

- 1 玉ねぎをミジン切りにして炒めます。
- 2 挽肉に対して1%の塩を入れ、練ります。
- 3 パン粉に水を加え、ふやかしてから絞ります。
- 4 卵を含め全ての材料を練り合わせます。
- 5 空気を抜きながら形を整えます。
- 6 真ん中をへこまし、へこんだ方から先に焼きます。
- 7 フタをして蒸し焼きにし、中火のまま焼きます。片面がシッカリ焼けたら引っくり返し、またフタをして反対側を焼きます。

「ハイ！ 人肉バーグの出来上がり！」

簡単調理教室へ200文字小説 (後書き)

本日は人肉100%のハンバーグでした(笑)

『地上A』ボタン（前書き）

今現在の日本の人口は約一億二千万人。

そして、日本人の年間平均死者数は約百万人である。

9 / 21 訂正

『地上A』ボタン

2011年夏、地上アナログ放送から地上デジタル放送に切り替わるので、僕はデジタル放送に切り替わる前に地デジ対応のテレビに買い換える事にした。

配達が終わって新しいテレビをリビングに設置し、電源を入れる。地デジの画面はアナログ放送と比べるともの凄く鮮明で、まるで生で芸能人達を見ているようで僕はとても感動した。買い換えてから少し経ち、とうとう地上アナログ放送がその役目を終える時が来た。

7月24日午前11時59分、テレビの番組でアナログ放送終了のカウンtdownが始まり、そしてカウンtdownがゼロになると同時にリモコンにあるアナログ放送のボタンを押すと画面にはアナログ放送終了のテロップが映っていた。

地上デジタル放送となった今このリモコンにある地上アナログ放送のボタンは何の使い道が無くなってしまった。

それから一ヶ月。僕はいつものように片手にお酒の入ったグラスを持ち、テレビ番組を楽しんでいた。

少し酔っていたのか、僕は何気なくリモコンに付いている『地上A』（アナログ放送切り替えボタン）と書いてあるボタンが気になり押してみた。

「ザーーーーー」

画面いっぱい白い点がランダムにポツポツと現れている。所謂いわゆるスノーノイズであった。

（まあ当然か……）

少しでも何かを期待してしまった自分に馬鹿らしく思い、地上デジタル放送に戻そうとした時画像が切り替わった。

（なんだこれ？ 手術室？）

そこは病室にある手術室のような場所で、誰かが手術を受けている。画面に映っているのはアナログ放送とは思えないような相当リアルな映像であった……

（うっ気持ち悪くなってきた）

かなりグロテスクな映像であったが僕はテレビから目を放す事が出来なかった。いや、僕はその映像に魅入っていた。

20分ぐらい手術映像を見ていると、突然「ピーー」と心拍停止を知らせる機械音が鳴ったと同時に画面はまたスノーノイズに切り替わってしまった。

僕はあまりにリアルな映像から、このアナログ放送は人間の最期を映していると思った。そうこう考えているうちにまた画面が切り替わった

それから僕はこの番組に魅入られ、時間があれば必ず見るようにしていた。病死、安楽死、事故死、殺人などさまざまな死をテレビを通して観察する事を楽しむようになっていった。

人間はこんなに簡単に死んでしまうか
人間はこんなにも大勢死んでいるのか
人間はこんなにもろく弱い存在なのか

僕の心はどんどんそのテレビに吸い込まれていく。

いつものように僕はお酒を片手に持ち、リモコンの『地上A』のボタンを押す。テレビ画面はスノーノイズの状態で、僕はドキドキしながら画面が切り替わるのを待っていた。
5分ほど経ち、画面が切り替わると……

（僕の部屋？）

画面に映っていたのは僕の部屋であった。その画面に映っていたの

は僕だけではなく女性の姿も映っていた。その女性を僕は知っている。その女性はテレビで夢中になりすぎた僕が別れた彼女であった。僕はテレビ越しに彼女の右手に光る物が見えた。

僕は画面から目を離し、後ろを振り向くと同時に彼女の持っている刃物で刺されてソファァーに倒れた。

（このテレビは僕の死期を映していたんだあ）

僕はそう思っていたのだが、テレビの画面はまだスノーノイズに切り替わらなかった。

僕の意識はだんだんと薄れていく……

それでも僕はテレビ画面を見続けていた……

そうして、テレビ画面の最後に映っていたのは自ら刃物を手首に当てている彼女の最期だった。

僕はスノーノイズになると同時に意識を失った

『地上A』ボタン（後書き）

あなたのテレビのリモコンにアナログ放送用のボタンはありますか？
絶対に押してはいけませんよ

樹海の沼と婆ちゃん（前書き）

9 / 21 訂正

樹海の沼と婆ちゃん

婆ちゃんの家には少年が遊びに行くと思わず言う事がある

『近くの樹海には入るんじゃないよ、底なし沼があつて危ないから』
少年が「うん！ 分かった」と言つと婆ちゃんは静かに少年に対して微笑んでくれた。

僕が中学生に入ると色々な苦痛が僕を苦しめた。学校では虐められ、家では除け者にされ、道を歩けば恐喝に遭う。自殺を考えた事も数え切れないほどあるし、何回も自殺しようとして失敗した。

だが、何であいつらが悪いのに僕が死ななくてはいけないのだろうか。僕は何も悪くない。

虐めた奴、恐喝をした奴、家族……

あいつらがみんないけないんだ！ あいつらが悪いんだ！ あいつらが死ぬべきなんだ！

僕の心は歪んだ、真っ黒に。

僕の嫌いな学校が終わり自宅に帰宅する。

「今日のご飯は？」

「……」

「母さん！ 今日のご飯は？」

「うるさいな、あんたに作るご飯なんてないんだよ！ 食べたければ自分で働いて稼いで、自分で買って食べな！」

母親がそう言い終わると僕の両手は彼女の首を掴んでいた。

気が付くと彼女は息をしていなかった。僕は両手を離して鏡に写る自分の顔を見た。僕は笑っていた。ああこれでいいんだ、僕を苦しめるものが居なくなつた。僕は間違っていない！ 間違っているの

は目の前の息をしていない女だ。僕は彼女をボストンバッグに詰め込み、婆ちゃんが行ってはいけなと言った樹海に向かった。樹海に入り沼を見つけると僕はアイツを沼に捨てた。

次の日、樹海の沼に捨てたアイツを確認しに行くと死体は無くなっていた……

それから僕を苦しめる奴はみんな殺して樹海の沼に捨てた。次の日確認すると必ず死体は無くなっていた。何人も殺したら、僕を苦しめる人はいなくなっていた。

ある日、殺人をする前から優しくしてくれた婆ちゃんから連絡があり、僕は久々に婆ちゃんの家遊びに行く事にした。

「婆ちゃん、ただいま！」

婆ちゃんは僕の姿を確認すると僕に

「私に隠し事してないかい？」

「してないよ！ 急にどうしたの婆ちゃん？」

「あんたあ、昔から行くなって言っている樹海に入っていないかい？」

「見たの……？」

「婆ちゃんが付いていくから、自首しよ」

（婆ちゃんもあいつらと同類か……）僕は婆ちゃんを無視して、キツチンに向かう

『ザーーーーーザーーーーーザーーーー』

僕は婆ちゃんを引きずりながら、樹海に向かう。そしていつもと同じく沼に放り込んだ。

次の日、死体は消えなかった。

樹海の沼と婆ちゃん（後書き）

今まで死体が消えていたのは？

インターネットサイト(前書き)

9 / 21 訂正

インターネットサイト

インターネットは暇な時間をいくらでも潰してくれる。
最近僕はとあるサイトを見つけた。

《イルカの夢でさようなら》

そのサイトを開くとセーラー服を着た女の子の下手な絵が描かれた画像が表示され、「私を殺してから先に進んでね」とスピーカーから聞こえる。

僕は恐る恐る女の子の画像をクリックする。

『グシャ』という音響と同時に先ほどまで普通だった女の子が口から血を出している画像が表示される。僕はもう一度クリックするとまた『グシャ』という音と同時に血だらけの女の子の画像がまた表示された。気持ち悪いサイトだと思いつつも僕はクリックを続ける……。女の子の原型は無くなり血溜まりの画像が表示された。僕の人差し指は止まることなくクリックボタンを押し続ける。

血溜まりが描かれていた画像はクリックを押すごとに元の女の子の画像に戻っていった。

（なんだこれ？ ちょっと気味悪いし意味不明だし……あれ？ まだクリック出来る？）

僕はゆっくりと女の子の画像をクリックする。

すると十個の黒い四角い物体の画像が膨張と縮小を繰り返しながら右から左へとスライドしている。

それぞれクリックすると気味悪い画像が出たり、変わった音楽が始まったり、広告が出たりした……

全てを見終えた僕はいったん観覧を止めて、ネットの掲示板でこのサイトの事を調べてみた

結局このサイトはウイルスなどは無く、結構有名な人が作ったサイトらしい。

正直がっかりだ。もっと都市伝説的な何かがあると期待していたのに、普通のサイトだったなんて。

そんな事を分かった上でもう一度僕はあのサイトを開いてみた。

さっきまで見ていた女の子の絵の画像が真ん中に添付されている……しばらく画面を眺めていたら、画面右下に点があった。

僕はマウスポインターを合わせてみる。クリック出来るようだ。

僕は押してみたが画像は切り替わらなかった。

「私を殺してから先に進んでね」

スピーカーからではなく、後ろから声が出た。

僕が後ろを振り向いたら

インターネットサイト（後書き）

このサイトは実際あります。結構有名です。

「イルカの夢でさようなら」と検索したら出ます。

URL <http://www.geocities.com/jp/AnimeComic-Cell/9459/10.html>

これを作った人は相当心が病んでると思います。

ポイ捨て（前書き）

9 / 21 訂正

ポイ捨て

「こらあ！ お前なに捨てとるんじゃ！」

後ろからもの凄い形相で年配の男性が僕に怒声を浴びせながら歩いて向かってくる。

「お前は常識つてのを知らんのか！？ ゴミはゴミ箱に捨てなさい！」

「はあ！？ ここはお前の土地か？ 偽善者ぶりやがって、殺すぞ！」

僕は捨て台詞を吐いて、その場から離れていった。

次の日僕の家の前には大きなゴミ袋が一つ置かれていた。

（誰だよ！ ここはゴミ捨て場じゃないぞ）
僕はしょうがなくそのゴミを片付けた。

その日から僕の家の前には毎日何かしらのゴミが置かれていた。それはゴミ袋だけでは無く、生ゴミが撒き散らしてあったり、もの凄い数の蟲の死骸、車に轢かれたであろう野良猫……

僕は毎朝置かれている複数のゴミに色々と参っていた。

このままだと周りの住人達に何を言われるか分からないので、僕は犯人を捜す事にした。

犯人捜しを決断した深夜。

僕は部屋の電気を全て消しカーテンの隙間からいつもゴミが置かれている場所を観察していた。

しばらくしたら誰かが来たようだ……あいつだ！ 以前僕にゴミのポイ捨てを注意した年配の男性だ。

僕は急いで自宅から外に出る。

「こらあ！ お前なに捨てとるんだ！」

男性は僕を見つけるとゆつくりと口角を上げ

「ここはお前の土地か？　ここはお前の土地か？」

何も言わず、男性を殴った。その後その男性を警察に突き出して一件落着かと思っていたのだが

もうあの男性の事は忘れていた時、僕がいつものように大学に向かうために玄関を開けると家の前には以前揉めた男性の死体と血まみれの包丁が捨ててあった。

初めて死体というものを見た僕は胃の中のものを入れて吐き出し、急いで携帯を開いて110番を押した。その後パトカーが数台来て、僕は警官にあれこれ聞かれた。

そんな最悪な一日を過ごした次の朝。

玄関を開けて家を出た僕は警官に止められて、殺人容疑で逮捕された。「冤罪だ！」と何度も繰り返しても警官は聞く耳持たずで「詳しい話は署で聞く」の一点張りだった。

どうやらあの男性を死に追いやった凶器から僕の指紋がついていたらしい……

ポイ捨て（後書き）

あなたはポイ捨てしていませんか？ 注意される前に止めるべきです

絶対に外さない占い師（前書き）

9 / 21 訂正

絶対に外さない占い師

オフィスレディーの私が唯一自慢が出来る事は『タロット占い』。家族、友人、他人と今まで何人も見てきたが外れた事は絶対なかったはずだった。

ある日、会社の同僚の男性が私に対して怒り狂いながら罵声を浴びせてきた。

「お前の言う通りにしてきたけど、全然昇進しないじゃないか！これまで使ってきたお金全部返せよ！返さなければ訴えるからな」私はお金を払うことは無かった。そのせいで毎日のように彼や彼の友人達から会社で嫌がらせを受けることに……。私の味方も一人、また一人と私から距離を置くようになった。

何もかも嫌になった私は解決法を見つげるために自分を占うことにした。

占いを始める前に必ず行う儀式をする。

まず体を清めるために体の隅々の汚れを洗い落とし、三時間お風呂に浸かる。その後お風呂から出て真っ赤なマニキュアを爪に塗り、化粧で顔を彩り、占い用の衣服を着る。

準備が出来た私は椅子に座り、タロットカードをかき混ぜ一枚一枚机に並べていく。

私は自分の運命を表示したカードを見るとゆっくりと目を閉じ、小さく微笑む。

しばらくしてから立ち上がり窓を開け、

「私の占いは当たったわね……」

彼女はそう言って窓から

残されたテーブルには死神のカードが残っていた

絶対に外さない占い師（後書き）

あなたは占いを信じてますか

タクシードライバーへ200文字小説 (前書き)

久々の投稿です。

タクシードライバーへ200文字小説

「 駅までお願いします」

「お客さん、電車乗り過ごしたんかい？」

「ちょっと飲みすぎちゃって……前の駅で降りるはずだったんだけど、居眠りしてしまっつい」

「そりゃ災難だな、 駅まで1万円超えちゃうけど大丈夫なんかい？」

「そうですね、彼女と割り勘すればなんとか払えそうです」

「お客さんの彼女は 駅で待ってるのかい？」

「今運転手の隣に座っているじゃないですか！？」「冗談きついですよー！」

「……………」

タクシードライバーへ200文字小説 (後書き)

会話文だけで一話作ってみました。

アルバム整理（前書き）

超久々の更新です

アルバム整理

夫とアルバム整理をしていた時、一枚の不思議な写真を見つけた。それは私が始めて主産した時に撮った一枚　ベッドの上で我が子を抱きかかえて幸せそうな顔をしている　だった。

よく見なければ分からなかったが、そこには病院の窓に怨めしい顔している男性がうつすらと写っていた……

「何だよ！　これ！？　心霊写真？」

「悪い冗談言わないでよ、気味が悪い」

夫には冗談ばく言ったのだが、私はこの写真に写る男性に見覚えがあった　私の夫は不動産関係の仕事をやっていて、私は所謂玉の輿に乗った。結婚のきっかけは私と夫に子供ができたからだ。……

夫は自分の子供ではないとは知らないが。　この写真に写っている男性の霊は私の元彼氏。私が抱いている子供の本当の父親だった……

ただ、もうその男性はこの世にいない。私が自分の手で命を奪った男性が今もまだ私の前に現れるなんて図々しいと思った。

それからしばらくして子供が喋るようになったある日。

近くのスーパーに行くために子供を助手席のチャイルドシートに乗せると子供が

「パパいつになったら帰ってくるの？」

「お父さんはお仕事で忙しいから、夜遅くなるよ。」

「お父さんじゃないよ！　本当のパパだよ！」

「お父さんはお父さんでしょ？　本当ってどういう事？」

「パパ言ってたよ、お母さんがパパを……」

私は子供が最後まで言いきる前には首を絞めていた。

アルバム整理（後書き）

子供には罪がないのに……

私は捨てられないんです〈2000文字〉

私は物を捨てることが出来ない。

着ることのない衣服、必要のない物、燃えるゴミ、燃えないゴミ、読み終えた雑誌、缶、空瓶、病死した犬と猫、末期癌で息絶えた私の母、私の家に対して色々と苦情を言ってくる隣の老夫婦、毎日のように私に対して結婚してくれると言ってくれたのに既婚者だった彼氏、その彼氏との間に出来た我が子……

これからも私の家には物がどんどん溜まっていく。

それでも私はそれらを捨てることはないだろう。

私は捨てられないんですへ2000文字《（後書き）

あなたの家の近くにこういった人が住んでいませんか？

更新スピードが遅くてすみません！

今月はこれくらいのペースで書かせて頂きます。

財布の忘れ物（前書き）

400文字程度のお話です。

財布の忘れ物

急にお腹が痛くなり、私は高速のパーキングエリアの駐車場に車を停める。

慌てながらも車から降りてトイレに駆け込み、ズボンを脱いで便座に座り込む。

私がトイレトペーパーに手をかけようとした時、そこに一つの財布があることに気が付いた。

無意識に財布の中身を確認するとそこには小さな黒いメモ帳が入っていた。

本当は一番最初に確認すべきなのは本人確認出来る物もしくは中に入っている現金のだが、私はそんな事を考えもせず何かに魅入られたかのようにそのメモ帳を手に取り中を確認した。

山田賢治、 斉藤洋子、 山口理沙、 成瀬武、 宮元朱美、 鈴木亮介……

メモ帳の中身には無数の名前が白い紙いっぱい書かれていた、何ページも。そして名前を塗り潰すように何重もの斜線が引かれている。

初めのうちは意味が全然分からなかったが最後の名前を見て凍りついた。その名前にはまだ斜線は引かれていなかった……

最後の名前を見たと同時に人の気配がして

私はゆっくりと上を見上げた

財布の忘れ物（後書き）

財布の忘れ物を見つけた時は気をつけてください

TDL(前書き)

遅くなるとか言いつつもわりと早めの更新です。

会社の夏休みが始まり、前々から彼女に行こうと言われて行くことになった東京デズニーランド。

入園するとそこにはデズニーのキャラクター達がお客様を盛り上げていた。

「ねえ、あの着ぐるみってプーちゃん？ あんなキャラクターいたっけ？」

彼女にそう言われ、彼女の指の指す方向を見るとそこにはニコリと笑っている真っ白な熊の着ぐるみが風船を持ちながらウロチョロしていた。

「デズニーみたいなのは疎いから、俺には分かんねなあ」

「そっか」

俺と彼女は着ぐるみの事を解決出来ずじまいで、そのまま夢の国のアトラクションを満喫することにした。

アトラクションを楽しみ、買い物も済ませた彼女はかなり満喫してくれたようだ。そのまま俺達は自宅に帰るためにデズニーランドから退園しようとしていた。

「あつ！ またあの着ぐるみだ！ 何しているんだろっ？」

彼女に釣られて、俺も顔を向けた。

例の着ぐるみは鼠の耳のカチューシャをつけた男女カップルを連れて、関係者以外立入禁止の所に入っていった。そして十秒もしない内に熊の着ぐるみだけがそこから出てきて、俺達の所に顔を向け一直線に俺達に向かってきた。

何故か俺は急に背筋に寒気がして危機感を感じ、彼女に「早く帰ろう」と言ったのだが彼女は夢の国でテンションが上がっているせいか帰ろうとしなかった。

着ぐるみは俺達の前に立ち可愛いポーズを決め、彼女の手を取り関

係者立入禁止に向かった。俺は少し嫌な予感がしていたが、「夢の国『安全な場所』』というレッテルがあったためか彼女を引き止めず楽しそうな彼女と着ぐるみに着いていった。

関係者立入禁止と書かれた扉を開け中に入ると熊の着ぐるみはすぐに外に出ていき、白い煙が四方八方から吹きだした。

「何かのアトラクションかなあ？　もしかして、夢の国の隠されたアトラクションだったりして」

「そんなアトラクションあるのか？　聞いたことないけど？」

「あれ？　なんか眠くなつて……き……た……」

「おい大丈夫か！？　いったん出るぞ！」

俺は慌てて彼女を抱えながら入り口から出ようとしたが、扉にドアノブが無かった。出たいけど出れないという状況が俺自身を混乱させた。

「『ドンツ！　ドンツ！　ドンツ！』連れが体調悪そうなので出して下さい！」

俺がどれだけ扉を叩き、どれだけ叫ぼうが係員は来なかった。そうして俺自身にももの凄い睡魔がきてその場に倒れこんだ。

「危なかったよ！　冷や汗ものだよ」

「本当だな、もし見つかったらお前もあいつらと同じ運命を辿ることになるからな」

「冗談でもやめてくれよ！　あいつらのように死んでもなりたくないよ」

男達の声が聞こえ、俺は瞼をゆっくりと開いた。そこには白衣を来た老人と着ぐるみみの顔の部分を外した男性が立っていた。

（……動けない！？　しかも喋れない？）

「ようやく目を覚ましたか？　動けないって？　それは麻酔をしているからさ。急だけでもうすぐ手術するから、これから頑張っ

いってくれよ」

(何を言っているんだこの人は?)

俺が不思議そうな目をしていたのか、着ぐるみを半分脱いだ状態の男性が顔を寄せて見下すような目で

「ほんとゴメンな！ お前はこれから記憶を消されて着ぐるみになる手術を受けるの！ それから訓練してデズニールランドの着ぐるみとして一生働くの！ ガツハツハツハ！ そいじゃ今日はお先にあらせてもらいまーす。お疲れ様でした！」

(記憶を消す？ 着ぐるみになる？ 一生働く?)

「もうそろそろお前さんの彼女の手術も終えたみたいだから、お前さんの番だな」

彼がそう言っていると俺を乗せた台車が動き出した……

俺は混乱しながらも必死に体を動かそうとするが少しも動けない。必死に叫ぼうとするが叫べない。

(助けてくれ！ まだ就職したばかりだし彼女ともこれから……)

…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ)

僕が心の中で叫び続けても、誰も返事はしてくれない。

(誰か助けてくれ……)

「わあー！ プーちゃんだあ！ お母さん写真撮ってえ」

彼は今日も何も考えず無邪気に着ぐるみとして働いている

TDL（後書き）

遊園地での見慣れない着ぐるみにはご用心を……

学生時代の青春（前書き）

更新スピードが落ちますなんか言っちゃって、二日連続投稿です。
今回は分かりやすいソフトホラーです。

学生時代の青春

「昔から好きなんです!」

僕は高校の同級生の彼女に校舎の屋上に呼び出されて、突然こんなことを言われた。

突然と言われても告白されるだろうと予測できたのだが……

「本当に? こんな俺の何処がいいの?」

この自惚れた台詞は間違っていない。

外見は中の中、惚れられるような中身でもない。

僕は不思議で不思議で仕方なかった。

「昔からずっと好きだったの」

彼女は好きといった漠然とした事しか言わなかったのだが、僕は彼女に好きと言われて正直嬉しくて舞い上がっていた。

「分かった。こんな俺で良かったら、宜しく願います」

「ありがとう」

そういつて彼女は僕に一步踏み寄ってきた。

「目を閉じて」

(まじかよ! 早くないか!?)

そんな事を考えつつも男性としての本能が目を閉じさせた。

(痛っ!)

痛みを感じた腹部を見ると、そこには半分お腹の中に入っている包

丁があつた。刺された腹部から激しい痛み、そしてそこから流れ出す血液が白シャツを真っ赤に染める……

「な……ん……で……？」

「私、昔から大好きなの。人が死んでいく顔を見るのが」

学生時代の青春（後書き）

普通の告白なら良かったのにね……

好きなタイプ（前書き）

更新のスピー……三日連チャンですw

前話の話に似ているような気がしますけど、違います。

好きなタイプ

「好きなんです！ 付き合ってください」

「ごめん、タイプじゃないんだよね」

どこにでもある告白の風景だが、普通ではない私はここでは引き下
がらない。

「好きなタイプってどんなの？」

「ん〜黒髪ロングの子が好きかな」

半年後。

「好きです！ 付き合ってください」

「ごめん、たしかに黒髪ロングの子が好きって言ったけどさあ、俺
はもっと胸が大きい子が好きなんだよね」

半年後。

「好きです！ 付き合ってください」

「ごめん、本当は目が大きい子が好きなんだよ」

半年後。

「好きです！ 付き合ってください」

「ごめん、もうちょっと鼻筋が綺麗な子が好きなんだ」

半年後。

「好きです！ 付き合ってください」

「ごめん、やっぱり整形する子は無理だわ」

二十年后。

「好きです！ 付き合ってください」
「こちらこそ宜しくお願いします」

ようやく私は彼のタイプになれたようだ。

好きなタイプ（後書き）

女の執念は怖いですね

今回の話は24話に少し似ているかも……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0685v/>

短編ホラー小説集

2011年10月21日08時02分発行